

5. 越沢 明氏

こしざわ・あきら 北海道大学大学院工学研究科教授

日時：2001年7月30日

出席者：伊藤隆 季武嘉也 中見立夫 所澤潤 服部龍二 櫻井良樹 矢野信幸
土田宏哉 黒澤良 武田和己 小宮一夫 戸高一成 伊藤光一 西川誠
梶田明宏 高橋初恵

伊藤 本日は、大変お忙しいなかを、北大の工学研究科の教授、越沢先生に無理にお願いをいたしまして。というわけで、かつて例のないランチタイムにすることになりました。ちょうど報告が終わったところで食事ということにしたいと思いますが、食事の最中にいろいろご質問するというので、あんまり質問をすると越沢先生が食事できないということになりますので、多少控えてくれないと……というわけにはいかないのですが(笑)。越沢先生、だいたい1時間かそこらざっとお話をいただいて。

越沢 越沢でございます。もう1枚、最初に略歴紹介みたいなので1枚お送りしておいたのですが、それはなかったですね。それでは、原紙がどこかに。

私自身は工学部出身ですが、どうしてこういう場にお招きいただいたのか、ちょっとそんなことも含めてお話ししようと思っております。このなかでご存じかもしれませんが、伊藤(隆)先生がずっとおやりになっている近代日本研究会、御厨(貴)先生も入っているのですが、これに一度呼ばれたことがありまして、ちょうど私が大学院を修了して、一回社会人になったあとですけれども、住宅政策と都市計画と、こんなことで一回書いたことがあります。当時非常にいろいろ勉強になりまして、そのときからお付き合いいただいています。

実は、私自身が学生時代最初に論文を書いたのも『アジア経済』です。ですから工学部の中では変な研究をやっております、なかではちょっと変な男だと思われていたのですが、学生時代、文科系のそういうところのゼミに出ているのがわりと好きでしたし、案外そちらの学のほうが向いていたのかもしれませんが、まかり間違ってもこんなふうになっておまして、こんなことを研究しています。

公式の略歴はまたあとで出るとは思いますが、都市計画が専門でございます。と言いましても、ここでは皆さんちょっとピンとこないかもしれませんが。普通ですと、建築とか土木のなかに一人教官がいるというのが普通の大学のパターンですが、東大の場合は都市工学科ができております。元々は、当時、日本が都市化の進んでいくなかで、国とか地方公共団体でこういういろんな都市問題等が非常に重要になってくるので、人材教育をしようというのが本来の理念です。もう一つは、当初の構想は大学院大学だったそうです。結果

的には、都市計画学科をつくりたいというのと、衛生工学科をつくりたいというので、二つ足して割って都市工学科にしなさいといういかにも日本的なことになったのですが。都市工学自体は日本語の造語でして、一応いまでもそういう形になっておりますけれども、それに本来は農学部にあった造園を入れて大学院大学をつくりたい。それから、当時設立の中心だった高山英華さんという教授の方です。都市学会ということで当時の慶應社会学の奥井先生を含めて技術者が一緒にやっていた時期が戦後しばらくあったのですが、そういう社会科学系を含め学際的にやる雰囲気はその後あまりなくなってしまいました。

ところが、ここにきょうのレジュメでございしますが、発端の話はちょっと飛ばしますけれども、いま欧米ですと、いい例がハーバードです。元々20世紀の初頭に建築を母体として都市計画とかランドスケールとかの学科ができました。いま現在、実はケネディ・スクール（政治学大学院）のなかに都市計画が入っております。アメリカの場合、むしろ都市の政策のなかの非常に重要な柱がこういう都市の社会資本整備になりますので、むしろ公共政策とか不動産とか一緒に学部をつくっているくらいも結構ございまして、むしろ日本のほうが旧態依然たるなかで遅れているということがあるかもしれません。逆に非常に弱い点が、われわれの工学部でやっている場合には政策議論が大変弱くて、ある意味では、いま公共事業がいろいろ批判されておりますが、肝心の建設省の技術官僚自身あまりそれを……。ま、いま大量の予算を持っていますので、そこだけに安住している、と言ったら怒られますが。どうもそういうことで、自分たちのやってきたことに対する、ある意味での正当な評価も世に問わないですし、一方ではあまり問題点も議論できないというのがあるのかなということを私としては実感しています。

レジュメに沿いますと、元々のこういう分野の発祥でいいますと、産業革命時代の、たとえばエンゲルスの本にあるような劣悪な住宅環境というのは当時の産業都市で全部起こりまして、それに対する改良をどうしたらいいかということのなかで始まってきた。個々には、下水道をつくったり、あるいは労働者の住宅をあまりにひどいスラムから直そうとか、そのために、陽射しが入るため、下水道を入れるための建築規則とかいろいろ。一方では、かなり開明的な一部の資本家が、自分たちの従業員のためにモデル的な住宅地をつくるとか。これは当時のキャドベリーとかいろいろ試みがあったわけですが、そういうもの。それから一方では、当時19世紀初めの頃から、ベルリンとかパリとかブリュッセルとか、欧米の当時の近代国家成立により、首都に大規模な都市基盤整備をするという時代が始まってきました。こういう一連の流れの技術といいますか、そういうものがずっとこの時期行われまして、そのうち、英語でアーバン・インフラメントとか、当時はシビック・インフラメントという言葉が多いかな。都市の改良ということで、現在の言葉でいうと都市基盤整備だと思うのですが、そういう言葉が出てきます。ただ、改良という言葉、インフラメントという言葉の背景には、承知していますように、当時の既存の都市のひどい状況がありました。

有名な話は、パリは18世紀頃ものすごく汚い都市だったのですね。皆さんご存じだと思いますが、食事の前で恐縮ですが、下水道が整備される前は、上からおまるをぶちまけてというのがヨーロッパの都市の姿で、ものすごく悪臭がプンプンしているという

のが実はかなりの時期まであって、いま日本の若い女性が「わあ、きれいな都市」というヨーロッパの姿は、実はこの百何十年ぐらい。むしろ欧米のあの列強が植民地を収奪した成果だと思えますけれども。そういう時代がかなりございました。有名なのは、ビックベンがテムズ河の悪臭で国会が開けなかったとか、いろんな話を皆さん多分ご存じだと思います。

こういうことが行われてきたなかで、一方ではアメリカの都市はそうですが、官庁街をきれいにしようとか、いろんな動き。それから、田園都市の運動は19世紀の末からですが、こういう社会改良のなかで住まい全体をどうするかというものがだいたい出てくるなかで、いまからだとまだたかだか90年ぐらいの感じですけども、ちょうどイギリスもアメリカもほぼ同じ年です。1909年、1910年と相前後しているのですが。タウン・プランニング、これはイギリス語です。アメリカ語ではシティ・プランニング。ドイツ語ですと都市建設、シュテーデバウという言葉になりまして、各国でちょっと違うのですが、ほぼ同じ時期にこういう概念、つまり都市の社会資本整備をある程度総合的に、あるいは長期的にやっていくと。ということは政策的にやるということになると思うのですが、そういう言葉が生まれまして、それに伴う法律とか役所のセクションが出てくる。そういうのがちょうどこの時期であります。

日本の場合は、非常に大雑把に言ってしまいますと、ちょうど明治政府が明治時代中期に市区改正、これは先ほどの都市改良の言葉そのまま。市区という言葉は当時の市街地という意味ですね。改正は改良ですから、都市改良の明治時代の日本語訳ですけども。これを東京中心に始めようとして、これはなかなか財源難でうまくいかなかったのですが。一方で、日本も同様に産業都市とかいろんな都市の拡張で問題点が生じてきましたので、主に内務官僚とかそういう人たちが、むしろ海外の動向を勉強して、遅れること約10年、大変早い時期ですが、1919年（大正8年）に都市計画法をつくりまして、ちょうど同じ年に道路法ができてまいります。ですから、大正期にいろんな都市基盤整備の考え方が導入されてきて、法律ができると同時に役所の課ができますので、ちょうどこの時期に都市計画課ができたり、あるいはそのあとで住宅課というのができたり。いろんなそういう社会政策的なものとか、いまの社会資本整備に関するいろんな法律制度、役所の官庁、またこれに伴って人を採用するというのが始まってきます。ですから、そういう時代がちょうどこの時期ということになります。ただ、それ以前に元々実は内務省に土木局は別途ありました。日本の場合は、都市の社会資本整備が欧米のこういう動向を見ながら少し社会政策観点で始まってきたということで、やや河川、道路、鉄道とかのそういう一般土木とは少し異質な課でできております。

内務省はご存じのように非常に強大な官庁ですが、大臣官房、いまでも大臣官房というのは中枢のところですけども、当時の内務省でいいますと、人事課、会計課、文書課、これはどこでも官庁であります、それプラス都市計画課だったのですね。官房四課ということで、だいたい都市計画課長は事務系のわりと出世ポストになっておりました。ですから、都市計画課長をやったあとは知事に出て、あとは局長まで行く人がほとんど。一方で、そういうことですので、歴代を見ていると、初期の数代の人と、少し飛びまして中期

になると非常に熱心な人がいるのですが、なかには1、2年そこにいるだけという方もずいぶんおられますので、人によって様々であります。比較的この仕事に愛着を持っている方が多かったように思います。ま、そういう経緯がありました。

いまでもいろんな政策的に肌合いが違うのがあって不幸なのですが、英語ですと、プランニングといいますと住宅も含めて都市計画を含めているのがほとんどですが、日本のたとえば地方自治ですと、この計画と企画という言葉は、内務省の地方局から始まって、要するに県庁の地方課ですね。ですから、いまでいう総合計画をつくっている。だから自治省と建設省の熾烈な争いがずっと続いていまして、それがいい状態になっているとはあまり私は思いません。向こうでいいますと、あまりこういうのは分裂していない感じです。だから日本独特というのがちょっとあります。一種、三分立しているといいますか。これはあまりよくないなあというのは感じています。

先ほどちょっと申し上げましたが、こういう分野の大学、専門家団体とか調査機関ということでは、元々欧米でも発祥は建築とか土木とかあるいは地理ですね。とくにイギリスは地理学の人非常に多いです。それから、農学のなかから一部ランドスケープとか造園学が始まっておりますけれども、最初の専門的な大学ができましたのは、リヴァプール大学に寄付講座ができました。この人はいまも会社が続いている。リヴァーですね。たしか男爵になった人で、この人がモデル住宅をつくったり、大学をつくったり、そういうことをやっています。そういうことでいきますと、日本の場合どうも、そういう不動産開発をした人とか、松下幸之助もそんなことをやっておられませんし、日本人の場合は社会資本整備に関心を持つ資産家があまりいないという感じがいたします。イギリスの場合はこれから始まりまして、ここが世界で初めて都市計画の雑誌をつくって論陣をはっていたりということがございました。

現在はそういうことで欧米では、建築及都市計画学部とかそういう学科が多いのですが、一方では、先ほど申し上げましたように、特にアメリカを中心に公共政策。日本ですと、いまの分野では御厨さんみたいに政治学出身の方だと思いますが、そういう人たちと一体でやるのが非常に多いということで。逆に言えば、しょっちゅうこの10年ぐらい規制緩和で、堺屋太一なんかしょっちゅう容積率緩和とか言っていますが、つまり容積率の操作が不動産の資産価値とかいろんなことと非常に絡んでいるわけでありまして、実はそれに対して本来の工学系の人たちがきちんと議論してこなかったというのがあります。それから、日本の場合、一方ではたしかに都市経済とかそういう専門家の方はいるのですが、数理モデルとかそういうことがわりと好きで、実態のたとえば東京の虎ノ門のビルの更新はどうなっているかということでの都市経済ということとはあまり言わないということで、いまもってどうも両者がうまくいっていないなという感じがいたします。

欧米の場合は、職能団体、学会と訳していますが、インスティテュートはわりと職能団体でありまして、一種のギルドに近くて、総会資格試験、かなり専門的な試験を課して会員にする。ですから、向こうですとわりと地方自治体の都市計画課長に相当するポストはいまでも公募が多いのです。わりと転々と移っているのです。日本とまったく違います。専門家になっておまして、その場合に、このタウンプランニング・インスティテュート

に加盟していることと、なおかつ給料は幾らで、車はありますか、ないとか、そんなことでいわゆる協会誌に募集広告が出ている。だから風土がちょっと違うといえますか、そういうことがあります。日本ではそういうことはまったくなくて、事務系、技術系を問わず、それぞれ役所なり、国でも地方自治体でも、そのなかでグルグルまわっているというのが実態でございます。

そういう専門性の部分と、それから特に弱いのが、政策的、あるいは経営的な視点。従来は、特に圧倒的に基盤整備が不足している時代はまずつくらなければならないというのが社会的な要請でありますので、まずそれをあれすると同時に、高度成長期は何だかんだいっても結局財源等が増えていく時代ですから、政策やマネジメントする視点があまりなくてもすんでいたといえますか、ただつくるのを一所懸命やっただけ。あるいは、一時期アメリカが不景気のときに非常に深刻になりましたが、高速道路が落ちてしまうとかよく言われましたが、つくったものをどう維持管理するかというところまでまだ行っていなかったということで、いま日本は、21世紀はまさにその問題が深刻になっております。そういうことで、従来、政策的、経営的な視点が希薄でいたということが、結果的にいまのような日本の、大学も含めたいろんな構成とか、政策研究院大学のなかに都市政策をまともに議論している方がいるのかわかりませんが、そういうことは多分弱いのだろうという感じがいたします。

戦前の状況をいいますと、戦前はまだ草創期で、予算も財源もない。いま盛んに問題にされている、来年から廃止するとか廃止しないとかとされている、いまでは非常に悪名高いですけども、道路整備特別会計のああいいう緊急措置法の5ヵ年計画もまったくなかった時代ですから、ある意味では自由に議論していても議論は面白いのです。ですから、人間はあまりお金のない時代のほうが知恵を絞ってがんばっているのかもしれませんが。

少しそういう状況を示すのにどういものがあるかということでお話しします。実はこの都市研究会というものが出している『都市公論』というのは大変面白い雑誌です。これは全巻復刻されていまして、実は復刻を勧めたのは私なのですが。リプリントを専門にしている出版社がありまして、そこに、これだったら売れるかもしれないよと言ったところ、おそろおそろ復刻したら売れたということです。実は文科系の大学の図書館がずいぶん買ったということがあります。これは後藤新平がつくった団体で、戦前の内務省都市計画課のなかに事務局があったという団体です。ですから後藤新平が死ぬまで会長で、死んだあとは歴代内務大臣がやった。当時の官僚は、わりとしっかりといろんなことをしゃべって書いているというので、だから非常に面白いというのがあります。ということで、ある意味では住宅政策を含めて議論している部分がありますので、そういうこともあったと思うのですが、史料価値もあるということで認められたのか、これはかなり各大学で購入していると思います。

もうひとつは、これも由来は同じで同じグループなのですが、後藤新平が東京市長時代につくった東京市政調査会。この雑誌が『都市問題』。これは現在でも続いています。実は現在の『都市問題』は大変つまらないです。非常に緊張感がなくて。書いている方もあ

るかもしれませんが。私も原稿を書いたことがありますのであれですけども。非常に現実離れした、浮世離れした議論をしているところになっておりまして。というと怒られちゃうかもしれませんが。

戦前はわりと同じグループで、つまり市政調査会が歴代、たとえば前田多門、これは2代目の都市計画課長ですが、そういう人たちが中心でやっけていまして、ほとんど同じグループなのです。非常にいま見ていて面白いです。

それで、市政図書館もつくった。これも問題がありまして。いつからどうなったのかわからないのですが、市政調査会はあるときから運営が政治学の人たちが中心になったんだな。ところが、どうも戦前の良さの現実の建設行政とかのあれが薄くなりまして、一方で市政図書館は、本を借りると図書館の職員が非常に嫌な顔をするというとんでもない図書館でありまして、しかも蔵書史料をどんどん処分しているのです。市政図書館の旧蔵印を押してある本が港区の郷土資料館に入っているのです。私はそういうことで経験がありまして、とんでもない組織になっています。

これは余談なのですが、例の日比谷公会堂がある、東京市政図書館は立派な建物でありまして、あれは安田財閥の寄付です。後藤新平が、安田善次郎さんかな、死ぬ前に遺言でもらう約束で、息子が寄付を嫌がったのですが、遺言の証拠品を出したらやっとお金をくれたという、あまりきちんと仕掛けをやると、のちの人たちがだらけるという証拠で、実は一生食えるようにあれは貸しビルにしたのです。立派なものをつくりましたね。あれは安田の寄付ですから。しかも土地は後藤新平の権限で、本当はよくないのですけれども、日比谷公園の土地を使ってしまったのです。いわゆるタダ。東京市は受け入れる条件で、その代わり日比谷公会堂をタダでもらった。そういう条件でやったのです。それはよくないというのもありまして、のちに日本はいたるところこういうふうに図書館とか博物館とかを公園に建てる最初の例になってしまいました。それは別としまして、あそこに共同通信はまだ入っていたかな。

伊藤 時事通信。

越沢 時事通信ですね。テナント料で食えるものですから皆努力しないのです。ということで、緊張感が欠けている。収入があるのですからよっぽど図書館はがんばればいいのですけど、あそこは10冊以上借りると、「もうあなたには貸しません」と言ったりするのです。私は20年前にえらい目にあいました。

伊藤 古いものを捨てていますよね。

越沢 捨てているんです。とんでもないと思いますね。戦前は非常にいい文献目録を出しているのです。海外文献を含めて非常にいい活動をしているのですが、いまは全然だめ…と言ったら怒られますが。私は、雑誌は十年以上読んだことがありません。

それと同じ傾向が、大阪都市協会、現在の名前です。当時の名前は同じだったか違ったかちょっと記憶が薄れたのですが。これは『大大阪』といいます。若い方にはちょっと読めない言葉かもしれない。昭和初期に、大阪、東京、名古屋が非常に急速に市街地を拡張した時代がありまして、そのときに、大大阪、大東京とか、つまりメトロポリタンですね。グレート・ア・トウキョウというのですが。そのときに『大大阪』という雑誌が出ました。

これは有名な関一市長時代です。この協会がいまでも存続しておりまして、『都市問題研究』という雑誌が後身なのですが、これも同じく緊張感のない雑誌なのです。

ということでは両方とも同じ傾向でありまして、戦前の生々しいときの雑誌はやはり面白いのです。これも同じ出版社に復刻を勧めたところ、復刻させないということで断られました。復刻は出ていないんじゃないかな。自分たちがやるとかといって。

櫻井 『大大阪』はCD-ROMで出ています。

越沢 あ、そうか。それでやめちゃったんだな。本当はやはり物があると違うんですよ。

ついでにいろんな雑誌を申し上げますと、実は内務省系の都市計画技術者が当時いろいろ地方に派遣されていますので、そのなかではいろいろエネルギーが余っている人々が名古屋に当時おりまして。というのは、名古屋がわりと区画整理で街をつくっているのですが、そのグループとか、独自に『都市創作』という雑誌を出した。これは一時期出していたのですが、後に『都市公論』に合体しています。吸収合併といいますか。それから、また再度再び、それじゃあやっぱり面白くないと思ったのか、昭和初期にもう一回『区画整理』という雑誌を出しました。これもずっと戦前は続いていたのですけれども、同じ系統です。区画整理という限定つきですが、これも、都市公論ほどではないのですが、比較的面白い議論をしています。

伊藤 これは現存と書いてありませんけれども、現存なんでしょう。

越沢 組織は別なのですが、考え方では同じグループで。

伊藤 あなたからもらったのだと「整理」と書いてあるから。

越沢 そうですね。結局、これが一回戦後なくなったあとに、さっきの都市研究会が戦時中の防空協会と合併しまして、つまり同じ人たちがつくっていますから、それで都市計画協会という団体にいまなっています。よく見たら、同じような宅地開発協会ってありますが、皆、旧建設省の一局で一協会を持っています。宅地開発協会って戦後できたところですけども。だからそういう感じのものがあまして、そこが1回出したあと、今度は区画整理協会ができたあとにそっちへ移ったと、そんな感じになっております。だんだん今、一課に一協会ありますから、今度また統廃合になるかもしれませんけれども。

それから公園緑地協会。これは現在は日本公園緑地協会という名前になっていますが、そのなかの緑関係グループが独立してつくった雑誌で、これの中心になった人が後に役人を辞めたあと東大の造園の教授になった人で、北村徳太郎といいます。この人がやっていたときは非常に活発にやっていて、戦前は非常に面白い雑誌です。緑に限定せずに、いろいろ当時のリージョナルプランニングとかグリーンベルトとか活発に書いています。

あと、旧内務省系でいいますと『道路の改良』。これはいまの日本道路協会の前身の団体ですが、やはり戦前のほうがまだ予算が少なかったせいか面白い議論をしています。いまの道路協会の雑誌は面白い論議がない。それから『水利と土木』、これは河川系です。ただ問題は、こういう雑誌もきちんとフルセットあるところは意外と少なく、文科系の先生方の目にはなかなか触れないというのが多分実態だろうと思います。

戦前の大学の状況でいいますと、国立大学のなかで都市計画講座があったのは京大のみでありまして、東大も当時はなかった時代です。文科系でいいますと、正式な名前は忘れ

てしまったのですが、関一時代ですが、たしか大阪市立大学に市政科ができたはずだったのですけれども、戦後は何かに化けたのではないのでしょうか。こういう伝統が一時期ありましたが、どうも消えてしまったということがあります。

役所のいろいろな関係でいいますと、官庁の試験研究機関というのがございまして、いまいろいろ法人化とかドタバタやっている最中ですが。内務省は土木試験所だったと思いますが、これは本当の道路の舗装とかそういうのを研究しているところですが、戦後は土木研究所になって、今回独立法人になっています。建築関係は、実は防空研究所が発足だったと思いますのですが、防火とかそういうことを研究してまして、それが建築研究所になったというのが多分……。本来ですと、皆さんピンとこないかもしれませんが、日本の都市計画は戦前から、土木系、建築系、造園系の三者でつくってまして、日本の場合は地理学だけなのですが、そのなかで非常に土木が強いのです。そういう意味でいいますと、都市計画は土木系のほうが技術系は強いのですが、どういうわけか国の研究所だけは建築にありまして。これは多分、この防空研究所にあったいきさつだったのかなという気がしております。それから、事務系が自分たちもつくりたいとつくったようなのですが、これはほとんど活動していない……というところ怒られちゃいますが、多分、皆さん何も気にしていないと思います。一応こういう組織がありまして。あまり活動していない感じですね。腰掛けという感じに見えています。そんなところがございます。

いろいろ順不同で申し上げますが、こういう関係の史料、保存文書とか刊行物とかアーカイブということでいいますと、元々、現在の行政のことでいいますと、文書保存をしない体質がまずございます。これはやむをえない部分もあるのですが、だいたい文書整理月間というのがありまして、これは保存するための月間ではなくて、捨てるためなんです。なるべく捨てるということでありまして。結局どういうのが捨てられるかといいますと、いろんな協会の刊行物とか報告書とかいうのをまずバサッと捨てますね。きれいさっぱり。というのは、まずスペースがないというのがあります。もう一つはこういう要素がありまして、これからの21世紀の行政の問題になると思いますが、いままでは過去の政策判断の検証を踏まえて新たに政策判断をするということをしたがらないといいますか。過去の政策を評価するということは、過去の誤りも含めてやるとなると非常に喜ばれないということでありまして、すぐ上司の人の問題点を指摘することになりますから、日本全体に基本的にこういうことをしない体質があります。そんなところもありまして。ともかく、これをしようとするのと過去のいろんな史料をだいたいとっておくのですけれども、私の経験でいろいろ聞いていると、ときどき熱心な人がいます。ところがそれを後を引き継ぐといつのまにか後任者に捨てられてしまう。だいたいそうです。もう一代ぐらい過ぎると、「なんか変な汚い史料がある。捨てる」と、だいたいそういうことがあります。つまり、必ず代々史料の大事さをわかる人が来ることはないということがありますから、最近2年あるいは3年で異動しますので、そういう意味での専門性はなくなっているというのは結果的に役所側の政策立案能力を非常に削いでいる感じが私はいたします。これは一般的現象ですね。

それから、今回省庁の合併をしていますが、結局執務スペースはまったく増えておりませ

ん。うちの大学はちょうどこのあいだ改修工事になったのですが、スペースは減らずにむしろ……。北大の場合、従来、昭和30年につくられた工学部の教官室は33㎡だったのですが、いまの文部省の基準は25㎡ですので、削れと。それで廊下をずらせというバカなことをいつているのです。でないと認めんと。本当に変な改修工事をやっているんですよ。今度札幌に来られたときにはお見せしますが、なんか文部省の改修のモデルになっているそうです。まったくばかげているといえますか。

たとえば東京が25㎡はわかるのです。北海道だったら100㎡にすればいいじゃないですか。土地が余っていますからね。そうすれば東大教授だった人が、「北大だったら行ってもいい」と。予算を4倍にするとか、そうしないとだいたい行かないですよ。地方の国立大学は、山形だつてつぶれそうだったら、面積を10倍にしますとか、そういうことをやらなきゃいけないと思います。ところが、現実にはむしろ東大がいちばん大きいですからね。やはりそういうことをやらないとだめだと思いますが。ということは余談ですけども、ともかくやはり執務スペースが狭い。

これは全然関係ないのですが、たとえば国際ホテルがありますね。海外チェーンのハイアットとかヒルトンの日本でやっているホテルは狭いのです。台湾、中国でつくっているのは国際標準なのですね。日本だけ全部が日本だけの非常に狭い標準で、鉄道も狭いですし、住宅もそうなのです。本当はそういうのを広げれば内需拡大になるはずなのですが、ともかく日本はなんでも狭い。ということで、政策研究院の教官室は幾らだか知りませんが、どうもそういうことになっておりまして、ともかくスペースがない。これは大変問題です。

もう一つは文書保存の壁があります。皆さん役所の関係のはご存じだと思いますけれども、永年保存、10年保存、5年、3年とかとなっているのですが、実は永年保存の文書の数がもともと少ないです。増えれば永久に増えてしまうというのがあると思うのですが。基本的には、こういう建設政策関係でいいますと、都市計画決定は地方自治体で永久保存になっています。と申しますので、実は建築制限をそれで決めていきますので都市計画決定だけは永久保存なのですが、ほかの都市計画法にからむものとか、道路法とか、いろいろあるのですが、永久保存の書類というのは極めて少ないのです。

そういう観点で、元々今回の文書が保存公開とかいろんな議論になる前からいったいどういう分類をしていたかというのを一回誰か研究すると、研究というか調査すればわかるのですが、実は啞然とする実態がわかると思います。

たとえばいい例でいいますと、区画整理の都市計画決定したのが、都市計画決定というのは永久保存なのですが、非常に似た制度で耕地整理というのがありまして。これは農地の統合なのですが、東京の市街地はわりとこれでできているのです。全国。これは実は永年になっていないのです。要するに、結局何がなんだかわからないというのが実態です。そんなようなことがあって、非常に情けない事態です。

私がいちばんネックだと思うのは、現在こういう文書公開の問題になったときに、アメリカなんかはよく、何十年後公開でいろんな史料が出てきたり、またさらに秘密で出さないとありますが、日本の場合、いまは時限性非公開という制度になっていないのではない

ですか。結局、見せるか見せないかという二者択一で、オール・オア・ナッシングみたいで。つまり、たとえば政策上重要な50年間は見せないけど、その後は見せるとかそうなると、だいたい50年ぐらいたてば関係者はいませんから、あとはもうどうでもいい、時代は変わったから責任をとらなくていいということになるのですけれども。そうしないとおそらく資料を残さないと思います。多分、この間の文書公開のいろんな動きが出たときに、おそらくさらに保存しなくなっていると思います。私も一度役人経験がありますから判るのですけれども、いざ文書公開制度をやると、日本の役所というのは非常につまらないことに律儀にやったりするのですね。メモでもすべて文書だと言い出すのです。となると、だいたいそんなメモは残さないということになりますね。つまり存在しないということを出します。だから、そういうばかげた制度の運用を始めようとする、だいたい何もできなくなる。

いちばん問題だと私が思いますのは、政策形成過程でいいますと、日本は審議会がいろいろさんざん言われますが、と言いながら、いろんな会議、政治でいえば閣議から始まっているいろいろあると思うのですが、審議会とかそういうものの資料とか議事録がまったく残ってないに近いです。たとえば私の知っている建設省関係の行政でいっても、都市計画審議会関係とか建築審議会、だいたい原局では一部あるのですが、きれいに残していません。今度文書公開になったときに公開扱いになるので逆に一部残すかもしれないのですが、事務資料をやっておくと、一回でこんなになりますから、残すかなあという。多分答申分だけ残すかもしれませんが、それでは何もなりませんので。いま議事録がこうあったら、一回議事録をつくって、氏名を消して公開するのですね。インターネットで全部。それだけは誰か趣味のある人は自分で保存するということがあるかもしれませんが、元の審議員会の氏名付きはへたすると残るかどうかが。本当はそれでないとあれなのですけれども。

ところが戦前はそんな制度ないですから、たとえば都市計画に関していいますと、都道府県毎の都市計画地方委員会議事録を印刷しているのです。これを保存している都道府県としていない都道府県がありまして、私が研究に使っているのはこの資料です。神奈川県では捨てられたとき私が全部拾ってきたというのがあります。ひどいのは、北海道では保存しているはずの文書がないとか。戦災にもあっていないのですけれども。調べた範囲では全国様々です。三重県は、あそこらへんは大して都市計画の仕事をしていないものだから戦前の保存文書というのはファイル1冊しかないのですが。私がちょうど当時県の景観計画の委員長をやっていたので、「見せろ」と言ったのですけれども、課長はいいと言ったのですが、担当補佐が嫌だと言ったりゴチャゴチャいうから、「いいから、いいから、見せろ」といって結局だいぶコピーしたのですが。だいたいそんな調子ですね。70年前のなんか誰も関係ないのですけれども、何か資料を出すのを非常に恐がる。そんな状況がだいたい一般的です。弱ったものだなというのがあります。

現状でいいますと、いろんな地方自治体でも、庁議とかああいう記録を多分残していないんじゃないかな。まして、市長が交代すると全部捨てるかもしれませんね。いまだんだん、なんとなく国の政策を受けてやっていくという下請け事務から、地方分権になりますと政争の時代になりますので、ますます残らなくなる可能性があります。

もう一つは、戦災でだいぶ焼けています。あと問題なのは、市町村合併をやるとだいたいなくなってしまうのですね。それから地方分権の問題。それから省庁再編でだいぶ今度捨てたはずです。そんな状況です。

それから、ある時期マイクロ化が言われましたが、これは非常に問題があります。マイクロ化をすると原文書を破棄するとなっていると思うのです。マイクロ化すると図面などはまったく読めないということがありまして、困ったもので、これは残らないことではありますが。あるところで、マイクロ化して捨てるはずのやつを、当時、県史編纂をやっているの、その担当課が一部を拾ってきて、またそれを私が一部譲り受けたというか、長期貸し出しのまま、かろうじて免れたというのが残っているのがあるのですが。それは本当は良くないのですけれども。そういうことで、結局なくなってしまうのです。そのあと、拾ってきたやつも、これはいったい何であるかがわからないとか、またその人が辞めたあと、嘱託ですら多分わからなくなる。そんなところですので、多分私が持っている以外の資料は捨てられているのではないかと思います。そういうふうなことがございます。

それも偶然なのですが、皆さんは国立公文書館をご覧になったことがあると思いますけれども、旧内務省関係を見ると非常に面白いといえますか。通常、近代史を研究している人が読みたい文書はまったく残っていません。多分、移管しているか捨てたと思います。残っている史料が、勲何等をやったとか恩賞関係の史料。見ても全然面白くない。それ以外旧内務省文書で保管されているものは全部都市計画なのです。これは想像なのですが、内務次官クラスをやった人が都市計画決定の史料を全部国立公文書館に移したのだと思います。いつ誰がやったかは全然わかりません。当時、都市計画決定というのは、都市計画地方委員会という内務省の出先が県庁を兼ねているので、そこから上がってきて、内務大臣の決定で、内閣認可の原議があるのです。それが丸ごと残っている。誰も開けないですから、きれいに製本してそのままですから非常に保存状態がいいのですが。ですから誰かが移管したのだと思います。不思議なことに、国立公文書館の内務省文書ってほとんどそれなのです。最近、一部の研究者が気づき始めて使い始めたので急速に破損する可能性があるのですけれども。昭和16年ぐらいまで残っているのかな。そんな感じです。これは誰かが、旧内務省の幹部が行ったと思います。つまり移す権限を持っていた人が。それ以外は、当時本省に残っていた史料は、昭和20年で、当時内務省庁舎は取り壊した人事院ビルのことですが、中庭で焚き火みたいに燃えていたというのは有名な話ですから、ほとんどありとあらゆる史料は焼き捨てたと思います。そんな状況ですね。少なくとも道路協会関係とか河川協会関係の史料が残っているのは聞いたことはありませんから、外郭団体も一切残っていないと思います。

公共図書館の状況でいいますと、皆さんご存じのように郷土資料室的なものを持っているところが全国ずいぶんございまして、だいたいそこ市史編纂とか県史編纂を兼ねているところが多いのですが、いわゆる都市基盤整備にまったく関心ない人が多いです。これは日本の歴史学が政治とかそういう感じで、下水道をどう引いたとか水道をどうしたというのは全然興味ない。ところが欧米はわりと関心あるのです。住宅地とか意外とそういうのをやっています、やはりこれは都市国家の民族と農耕民族の違いなのかなという気も

するのですが、ある意味ではお金がどういったかということは非常に重要なのですけれども、意外と皆関心がないというのがあります。

例でいいますと、東京都の中央図書館に江戸東京室といったかな、何かそんなのがありますが、ほとんど何もないです。たとえばの例ですが、興味があれば私の論文を差し上げますけれども、阪神地域で有数のきれいな場所が、夙川公園とありまして、ブランドのイメージのところ。これは川が全部公園化した戦前の非常に優れた都市計画なのですが。それはそれでいろいろな物語があるのですけれども。そこ沿いにいま図書館とか市役所があるのですけれども、西宮市のシンボルであるそういうものについての史料がまったくないのです。私は旧内務省関係者からもらった史料のコピーを西宮市役所にあげました。そんな状況ですので、まったく何も残っていないといえますか、集めようとしませんか、集めても出てこないのか、ちょっとわかりません。

欧米ですと、とくにヨーロッパですと、都市博物館にずいぶん城壁がどうできたとかいろんな展示があるのです。ヘルシンキなんかですと、各住宅様式の変遷なんていうのがあったり、そんなのがあるのですが、日本は非常に関心が薄いです。

江戸東京博物館は比較的、建築史の藤森照信が絡みましましたので、建築関係の史料収集はやっているのですが、都市にはあまりっていない。若干違うのは、唯一、新宿区立歴史博物館かな。あそこは大名屋敷があったとか玉川上水があったということで若干関心があるのですが。それから、相模原市立博物館ができたときに学芸員の人が保存史料を見てくれというのがあって見たのですが、見事に史料がなくて。都市計画の話を知ったのですが、かろうじてこんなぼろい地図がありましたというのを見ていたのですが。結局、ほとんど当時の市町村にはないというのが実態です。相模原軍都計画は私はまだ詳細な論文にしていないのですが、多分私個人がいちばん持っていると思います。

それから東京都公文書館がありますが、ここは唯一例外がありまして。内田祥三という方は、皆さん知らないかもしれませんが、昭和19年か20年頃東大の学長ですが、東大の建築のボスだった人です。いまの東大本郷のキャンパスの設計をやった人です。この人は、私の岩波新書の本をもしご覧になった方は出てくると思うのですが、日本の建築というのは非常に特殊で耐震構造の研究が盛んなのですが、それを始めてやった人は、佐野利器という非常に若くして大ボスになった人です。この人が後藤新平のプレーンで、都市計画法をつくったり何でもやったスーパーマンみたいな人なのですね。内田祥三は佐野利器の弟子みたいな人です。佐野利器が早めに東大を飛び出しちゃったものですから、この人だけが唯一残って。というので、そういう偉い人なものですから、結局、東京都の審議会か何かをやっていたので多分その関係だと思ってしまうのですが。一つの文書が残る条件は、息子さんも引っ越ししない人という。戦前から住んでいるそれなりの人はだいたい23区内に住めますので、なおかつ息子さんがちゃんと継げる人ですとだいたい史料が残っているのですが。息子さんも実は東大教授だった人です。多分、かなりの部屋を史料が占拠していたのでしょね。持てないというので、ともかく東京都に寄託しました。丸ごと残っています。そういう点では東京都公文書館は律儀ですから、文庫ができていて、ある程度内田祥三に関する物という限定つきですが、東京都の審議会、建築とか都市計画関係

のものはかなり見られるのはこれが唯一です。私の大学の後輩で最近こういうのをやっている大学院生に聞くと、一部の公の文書が破り取られてなくなっているとか、そんなことを言っていて、こういうのを使い出すと、ちょっと不埒な人がいてどうもそういうことをやっているらしいのですが。これが唯一。

伊藤 都市工にやはり内田さんの文書があると思いますよ。

越沢 多分、分化したのですね。純粹な建築関係をどうもあっちに。

伊藤 あれは僕らが百年史のときに全部、それで建築関係を都市工学科に、われわれのほうはそれ以外のものを全部持っていったはずです。だから、いま東大百年史の史料室に膨大なものがあります。

越沢 そうすると三分割なのですね。そういう東大に関係ないものがあっちに行っているのでしょうかね。

伊藤 いや、東大に関係ないものもずいぶんたくさん東大が持っています。

越沢 そうですか。じゃあ、分けた時期かもしれないですね。そんな感じで、逆にいうと、公文書館に出ている目録を見ると、東大の総長に関するものとか、東大の事務運営に関するのは一切ありませんので、多分寄託するときにそれを分けたのですね。

所澤 分けたのです。一部間違っていて、公文書館に入っているのと、それから逆に東大の史料室に残っているのが多分あると思います。

伊藤 逆もあるんですよ。

越沢 ただ、やはりこれだけの大人数でないとなかなかそれはできなくて、少なくとも工学系のいろんな、たとえば関東大震災のときのいちばん技術系のボスが佐野利器で、彼が全部指揮権を持っていたのですが、復興局の橋梁課長だった人が後に現職のまま東大教授を兼ねていましたね。復興事業が終わったあとに東大の専任教授になっている田中豊という橋梁のボスなのですね。この人の文書がどこかにあるなんていうのは聞いたことがないです。

伊藤 佐野利器はどうですか。

越沢 佐野利器の文書も実はなくなっちゃっているんです。息子さんが戦死しまして、全部娘婿なのです。それは健在なのですけれども、佐野利器の史料がどうなったかという、何もなくて。

伊藤 内田さんの自分の家って行ったことがあります？

越沢 私は行ったことないです。

伊藤 アレ面白いですよ、東大のミニチュア版。非常に使い勝手が悪いというので、後ろのほうに和室をつくって、家族は皆そこで住んでいるのですけれども、壊すに壊せないで。まだ残っているんじゃないかと思えますけれども。

越沢 佐野利器も、つい最近そのお孫さんか何かになんかちょっと朝日新聞記者から聞いてみたのですけれども、それはないと。ただ全員あつたわけではないので。というのは、三人ぐらい娘さんがいまして、そのうちの一人が霞ヶ関ビルの設計者の内藤さんだったかな。耐震構造の系統の人とか、娘婿は皆建築のそれなりの人です。そういう一族ですからいまでも健在なのですけれども。遠縁の人が先端研をつくったときの大越（慎一）教授。光フ

アイバーをやっていた。なぜか私の本に興味があって、実は私は佐野利器の遠縁なんだとかいって。そのうちに一族全部あたってもらおうかなと思いつきながら、ご本人が急死してしまったものですから手づるが一回消えてしましまして。そんな感じがあります。

大学図書館のアーカイブというのは、大学図書館自体に文書館があるというのはやはり日本はないと思います。私がたまたま知っている例でいいますと、コーネル大学。李登輝が学んだところですが、ニューヨーク州の郊外の田舎町にありまして、向こうでは有数の私立大学なのですが、ここにアーカイブがあるのです。図書館のなかにちゃんとした公文書館があって、大学設立者とか関係者の文書を置いてあるのです。それは本格的な文書館なのです。私が見たのは、アメリカの有名なラドバーンという住宅地があるのです。都市計画では必ず出てくる。その設計者が、スタインというアメリカの建築で非常に有名な方でありまして、その人の文書が一切合財全部コーネル大学のアーカイブに行っているのです。設計のいろんなデッサンから。それだけですごい箱があるのです。何箱か見てみたのですけれども、箱にそのまま入っているのですね。その専門の司書の人がいましてね。その代わりちゃんと、コピーを注文するとすごいのです。向こうの公文書館でやってくれて、しかも UPS か何かでちゃんと日本まで送ってくれますから、すごくそういうサービスがいいのです。お金さえかければ幾らでもコピーできるという。だから、大学設立に関係する牧師とか、5、6人の人の大量のいろいろな文書が入っています。そういう設備はすごいと思いました。日本の大学ではそんなのはいないんじゃないかな、ありますか。

伊藤 東大が小規模ですけれどもありますよね。

越沢 そんな感じで、国立公文書館はしようがないですから、すべていろんなものを政策研究院大学のところへ全部持ってきちゃうというのぐらいやると。六本木の土地がありますから、幾らでも有効活用して。

伊藤 やるつもりでおります (笑)。

越沢 あそこは全部容積率が高いですから。森ビルがどんどん超高層を建てているので、容積率2000%も可能ですから。本当ですよ。多分、何千%もできますもの。地下にどんどん掘ればいいのですね。

伊藤 日照権とかいろいろな問題があつて。

越沢 すぐ側が森ビル、森ビルが建てれば絶対です。あるいは森ビルの史料を持ってくるとかね。それで森ビルに寄付してもらおうとか。政策研究院と抱き合わせで容積率を上げるとか。そういう知恵を出すよ。

伊藤 いろいろ考えてみます。

越沢 そういうのはいくらでもお手伝いします。あと幾つかの例で、北大の例でいいますと、北大には個人の名前を出した文庫がひとつありまして、これはやはり北大総長なのです。高岡(熊雄)さんといつて、経済学部長だった人で学長をやった人です。多分、この人が大物でその蔵書を捨てるに捨てられなかったのでしょうね。由来を見ると、経済学部で引き取っていて、なんかもう処理に困ったらしくて総合図書館に来ちゃった。これは見られます。見たら、本人がヨーロッパ旅行したときのパンフレットとか、ありとあらゆる変なものが入っているのです。そのなかにたまたま、本人が一時期北海道のいまの都市計

画委員会をやっている在任中の期間だけの史料が残ってしまっていて、これはほかにまったくない史料です。道庁にゼロ、札幌市にはまったくありませんから。それを見て早速私は論文を書いたのですけれども。偶然そういうものがあると、何かめっけものがある、人によっては、全然別の観点で見ると宝物があるかもしれない。だから、捨てるに捨てられないのでしょね。

伊藤 ついでにちょっとお話ししておきますが、僕はいま秋田市史に関係していますけれども、都市計画関係がかなりありますよ。

越沢 そうですか。あそこは実は非常に優秀なことをやったものですから。昔の小畑知事のときですね。

伊藤 そうです。今度ご覧になってください。

越沢 そうですね。

あと幾つかの例でいいますと、都市計画協会の山田博愛文庫。これは私の本にも出てきますが、内務省の最初の都市計画技師です。第一技術課長で土木の課長をやってから、帝都復興事業の道路計画を全部やった人なのですけれども。山田博愛はそのあと日大教授をやっているのです。日大は、実は佐野利器が工学部をつくったのですね。ですから、結局、内務省の自分たちの部下がみんな教授をやっているのです。で、お孫さんが約10年前に日大に持っていったら、まったく興味ないと断られた。しょうがないので、唯一関係あるだろうと都市計画協会に。当然、全部理事でしたから。そうしたら、たまたま偶然引き取ったのですね。引き取った経緯は、そのなかの調査課長の人、市区改正事業史が協会にないので面白いと思って引き取ったらしいのですけれども。その整理中のときに私はふらっと行って全部見せてもらって、やっているうちに出てきたのが、私の本に書いた帝都復興計画の原図なのです。それは私の本に書いたものですから、それだけをしょっちゅうマスコミがどうでもいいテレビの取材のときに見に来るので、そういうことは非常に問題があるので一切見せるなど言ったのですけれども。ということで、それで私の本が書けたと。つまり、やはり図面がないとわからないのです。ということで、これは本当に唯一です。内田祥三の史料にも残っていない。これもまったく偶然。ただ、都市計画協会は、ここもいま非常に財団の運営が厳しいですから、図書として公開する体制がまったくありませんので、そういうことは公開できない状況です。

それから大阪工業大学。玉置豊次郎という人は大阪工業大学の建築の教授でありまして、この人も内務省の役人なのです。大阪府の課長か何かをやっていたかな。工業大学の創設期に非常に功績があったというので、この人の史料だけがやはり残っているのです。こんなような由来がないとだいたい残らない。これもそんなにいい史料は残っていないですね。ほんのわずかそこしかないのがあるぐらい。ということで非常に情けない状況で。

最近の例を言いますと、東大都市工学科をつくった高山英華教授の史料が全部一時期都市計画学科に寄贈されて高山文庫をつくるとうことになったのですが、都市計画学会で都市計画図書館をつくる構想がつぶれました。つまりバブルの時期につくりそこなっちゃったのです。そのときに、ある大手ディベロッパーが、自分のつくるところで、会社創設何十周年記念でそういうスペースを提供してもいいという話があったのですが、そういう民

間ディベロッパーの話に乗るのもどうも良くないという意見もあったり、いろんなことがあって結局実現しないうちに持て余して、民間ディベロッパーもこんなのはもう持てないと倉庫のなかに朽ち果てるようになったので、また東大に戻りました。ただ、都市工図書館もスペースがないですから。ということで、非常に困っているという場合は、場合によっては政策研究院が引き取ることもあるかもしれません。

伊藤 そうですね。

越沢 そこにはもう一つ、内務省の技術系の幹部が持っているので唯一いい史料と一緒に抱き合わせになっております。奥田教朝さんという、オクダキョウチョウと通常われわれは言っていましたが、教育の教に頼朝の朝と書きます非常に古めかしい名前ですが、この所は実はもともと大名でして、越後の堀家の直系の子孫です。堀家というのは明治維新後に奥田という名前に変えたのです。秀吉の部下になる前の旧姓に戻ったのです。その殿様でして、本当に鼻がピーッととんがっていて殿様面している人なのですが。その人はものすごく史料を大事にしているのです。なおかつ幹部ですから膨大な史料を持っている人なのです。私はわりと元気な頃にインタビューなんかをしていて、「君、こういうのを持っているかね」なんて、そんな感じだったのですけれども。この人が亡くなった直後に、危ないというので、東大の新谷先生に。新谷先生は元学会長ですから、学会で一時預かれと。それがいま一緒にそっちに移っています。だから高山文庫と奥田文庫が丸ごと行っていて、まったく未整理の状況です。

伊藤 それは東大の図書館ですか。

越沢 東大の都市工学科です。どうなるかわかりません。つまり、結局、ゴトゴト動いちゃったのですね。結局、都市計画学会の図書館構想が実現しませんので、そういうものが一カ所集中に集中することが出来なかった。新谷先生自身は都市計画図書館が実現しなかったので諦めて、ご本人は東大のあとに日大教授となりましたので、日大のなかに自分の史料を全部移したのです。東大教授で審議会委員をしていると、膨大に、完全に積んでこのひと部屋ぐらいたまりますから。そういう人が代々続くと、さっき言った役所に残っていない史料が全部揃うのですけれども、残念ながらもう無理と。

もう一つ史料が丸ごと残っていますのは、このあいだお亡くなりになった井上（孝）先生。これは東大の都市工の教授になった人ですが、元々は戦前の東京都、それから建設省の区画整理課長をやって東大教授になった人で、非常に温厚ないい学者の先生なのですが。この人のお弟子さんの教授の一人が東京の高田馬場のビルオーナーですから、その個人資産の上にドンと乗っている。お弟子さんももう還暦ですから、どうするのかなという。君のところで預かってくれというので預かっている。

あと、物を持っていたのは、有名な山田正男という東京都の天皇と言われていた人です。その人の史料は、奥さんが引き取ったあと、東京都の財団法人のほうに行くようです。いま財団法人も運営が危ないですから、また流浪の旅になるのではないかという。だから、それも政策研究院で引き取るしかないんじゃないかという感じがいたしますが。やはり最後は国の史料にしないとだめですね。だいたい財団法人もつぶれる時代。

伊藤 大学もつぶれるかもわからない。

越沢 そうですね。東京は石原（慎太郎）知事になってからどんどんいろんな物をつぶしていますので、最近本当に資料館がつぶれた例があります。東京都が緑の図書館というのをつくっていたのです。これに公園緑地関係のいろんな史料を集めて、都立戸山公園というところにつくって公開していたのですが、石原知事のあれでバツサリ廃止になりまして、散逸したそうです。そういう図書史料は廃棄したみたいですね。本当の公園の図面とかは元の担当課に戻した。最初はあそこにあったのです。日比谷公園のなかの瀟洒な木造のコテージがあるでしょう。あそこに最初は資料館がありまして、それが都立の戸山公園に移って。その段階で実は行政史料はだいぶ捨てられているのです。つまりこういう刊行物が。日比谷公園時代にあって緑の図書館にないのを私は見つけているのです。私が探していたのは皆それだったのですけれども、全部ないのですね。バツサリ消えていて、また東京都の史料がバツサリ消えた。そういう何度も悲しい運命をたどっているということで。ですから、そういう史料がいかになくなったかというのを私が書くのかどうかわかりませんが、そんな感じがしております。

限られた範囲でいろんなことがありまして、ない、ないという話ばかりして情けない話なのですが。根本原因は、いま言った役所の問題もあるのですけれども、都市学といえますか、そちら側でそういうことを欲する研究者の層が薄いということと、それに対応する東京を中心としたしっかりした組織がなかったということなのだろうと思います。

たとえば、きょうは御厨先生が見えていないですが、都立大学は八王子に移転したときに都市研究センターをつくって強化したはずが、実は図書収集機能はものすごく弱いんですね。私から見て何も集めていない。たとえばさっき出た山田正男の史料なんか、東京都のボスだった首都整備局長ですから、真っ先にもらってもいいのですがやっていないのです。歴代都市計画局長、建築局長の史料を収集したということは全然やっていないのです。ということは、都市研究センターはそういう関心事がまったくない。というので、あの人たちは何を研究するのでしょうかという感じがしますが。つまり、あそこは東京都を中心に都市研究をすることが使命のはずなのですね。自らお膝元の行政史料を集めていなければ、誰が集めるの？ という感じで、私はちょっと情けないなと。

伊藤 都立大のセンターというのはどこについているのですか。

越沢 いま大学本部直属の唯一研究所という、格が高い研究所なんですよ。格が高いけど、史料収集機能は弱い。

武田 全然何もやっていないですね。

越沢 つまり関心のある研究者がゼロなのです。だから、そこに都市政策を本当にやっている人が、文系、技術系出身者それぞれ一人ずつぐらいいないとだめでしょうね。

伊藤 一人でもいればやってくれるけど。

越沢 いないですね。ということがあります。それはいまの大阪市立大学も同様でありまして。大阪市大は市政科時代の名残なのか、大阪市立大学の図書館はあの規模の大学にしては都市政策に関する古い図書が多いのです。多分その蔵書の名残ですね。いまはそういうのをやっていないと思うな。つまり集める人がいないのですね。いまの顔ぶれを見ると、文系、理工系を問わずにいないのです。あそこだったら、大阪市の歴代幹部の史料を集め

たり、いまではオリンピック招致にいかにか失敗したかという史料とかやればいいのだけど、全然だめですね。そんな感じで、困ったものだなという感じがいたします。だいぶ脱線していて、記録に残るとまづい話をして。

伊藤 残ってもいいですよ。残さなきゃいけないです。

越沢 現職、生きている人の名前が出てくると恨みを買うので（笑）。

ちょっと脱線しますが、国立公文書館はそういう事情で大変貴重なある時期の史料が集まり、昭和初期から昭和10数年頃の日本の主要都市の初期の都市計画史料がほぼ全部残っています。しかも、各自治体で持っていない史料が多いのです。ということで大変貴重なので、あれは破損しないようにきれいな形で一回保存処置をとらないと危ないなと思っているのですけれども。いま中途半端に一部の研究者が利用し始めているものですから。

皆さん、ああいう文書を見たことがないかもしれませんが、保存用ですから、このぐらい大きな図面を折りたたんで、きれいにパチーッと畳んでいるのです。あれは、一回開くと、そのたびに破れてしまうのです。折るのがひとつの技術みたいな。本当に保存用なのです。多分、あんな折り方はいま出来ませんね。それから当時の図面は手で書いていますから、都市計画道路の線をピーッときれいなカラスミで引いている。当時、都市計画課のなかに美大出の人間を雇ったりしたのです。図工ということで。そんな時代ですから。もし興味があれば、ぜひ丁寧に扱ってご覧になってください。閲覧は自由ですから。あんまりこういうのを知らせてしまうと、破損するかもしれないのですが。

国会図書館の問題点は、地図室が、日本の地図とか、多分いまの総合資料館……もう総合資料館ではなくて東京大学の図書館というのかな、総合資料館というのかわかりませんが。地理学系の方がやりますので、国土地理院が地形図しか興味がないのです。せいぜい伊能忠敬だけなのですね。となると、都市計画図にまったく興味がなくて。ところが、日本の詳しい都市図は全部都市計画行政でつくっているのです。つまり国土地理院というのは縮尺一万の一の地形図を出していますが、本当に詳しい地図は、実は都市計画行政が縮尺三千分の一でつくっているのです。都市計画課のなかに測量部隊がいて、そこに大量の職員を雇っていたのです。つまり、旧帝大出の学士は上の幹部で、その下にいろんな作業部隊があって、いまではそれは民間外注なのですね。それは大量の職員を抱えていた。その人たちが全部測量して図面をつくっていた。ですから非常に詳しい史料で。しかも、建物ごとに塗ったり。ちょっと興味があると、そのなかに、当時貸し座敷はどこにあるとか塗るわけですよ。そういう図面もあるのですね。まさにそれは重要なのです。そういうので用途地域を決めますから。それを文科系の研究者が使っているというのを誰も聞いたことがないですね。それをまた収集しないのです。そういう図面があるのですが、国立国会図書館もそういう観点がありません。

東京都についても、さっきの東京市誌稿。こんな状況ですね。

伊藤 東京市誌稿は？

越沢 まだ続いているのかしらね。

伊藤 続いていると思いますけれども。

越沢 大正期までなかなかいかないですね。

西川 いま都市編が明治10年代なかばぐらいまで。

越沢 だから息切れして終わりになっちゃうのかな。東京市誌稿の一連でいうと、東京都の幹部職員が持っているありとあらゆる文献資料はよこせとやるべきなのですけども、いま、それをやる気力とお金がないんじゃないかしら。実は13号地もビルが全部余っているんです。入り手がないので、東京都は自分たちが入っているのですね。東京都が自ら外郭団体に補助金を出して、そこが家賃を払っているの、結局、自分たちでやっているだけなのです。だからあんなところにやるとかね。一回赤字で処理をして、何かそういうものにするということをやればいいのですけれども、そういう文化的な政策は石原さんはない感じだからね。

伊藤 ない感じですか。

越沢 その点は関心ないんじゃないかな。逆にいうと、カジノをさせるかわりにそういうことに貢献するとかね。そういうセットにしないとだめですね。罪滅ぼししないとやはり危ない。だから笹川良一のあれが一所懸命あちこちに寄付するみたいに、石原さんがカジノをやるのはいいけど、カジノの上がりの一部をそういうふうに文化政策にセットするとか、そういうことを言うブレーンがいないとね。そういう人がいるのかどうかね。

伊藤 御厨君とかは（笑）。

越沢 それで、さっきの緑の図書館は廃止ですね。

それから市政調査会。これはまったく惨憺たるありさまで、本当はあれを召し上げたほうがいい感じがします。

それから名古屋都市センター。これだけは大変素晴らしくて、戦災復興記念で、戦災復興の利潤で、いま名古屋は、名古屋に土地勘がない方はわかりにくいかもしれませんが、金山駅という中央線と東海道線が分かれるところに高層ビルを一個建てまして、それをつくってしまったのです。そこは区画整理の記念でつくった建物なのです。都市センターというのを作りまして、職員は全員市の出向です。そこに戦災復興関係の文書、それからいろんな都市計画関係の本を全部集めていまして、しかも全部名古屋在住の若い研究者に見せたり、いまは部屋を貸す研究員を公募したり、研究助成で1件50万とか、唯一まともにこういうことをやっている。ですから名古屋地域における都市研究に非常に役に立っていて、そこにテナントでポストン美術館があるのです。上のほうが名古屋のグランコートホテル。あの建物は全部償却していますからだいじょうぶです。あれはつぶれないですね。そこは名古屋都市計画のいろんな展示があったりします。

私はあさってそこに講演に行くのですけれども、『名古屋都市計画』という分厚い本を出しまして、文書と地図と。このような本は唯一、名古屋だけです。ああいう基礎的なそういう文献があると、それを基にいろんな研究を始められるのですね。私は以前都市計画学会の石川賞というのをとったのですが、その石川賞の石川栄耀さんという学会をつくった人が名古屋の都市づくりをやった人なのです。それで無事受賞したものですから、その石川賞記念受賞パーティーというのがちょうどあって、その講演会をやるのですけれども。名古屋ぐらいですね。それは東京もできなかつたし、仙台もだめだし、大阪も、神戸なんかどうしようもない空港をつくったり。だめですね、全部失敗して、情けない。

大阪は実は都市工学情報センターが細々とあるのですけれども、史料収集機能は弱いです。神戸はまちづくりセンター。これは市民参加の啓蒙普及のためにやったのですが、唯一、阪神淡路大震災のときのまちづくり準備協議会の史料は全部ここに残っています。これはその市民まちづくりセンターで中心になっているコンサルタントの人が仕掛けて、いろんな住民協議会であだこうだやったファイルが全部残ってしまっていて、これは宝の山で将来役に立つかもしれません。

都市開発協会というのは東急がつくっている団体で、赤坂の東急ホテルのところにあります。これはつまり、最近はあるんまり活動していないかな、一応図書館の目録をつくっていると、ディベロッパーがつくっている団体なのですが、ある時期、かなりこういう行政史料を集めたり、宅地街指導要綱を集めたりやっていました。つまり、ディベロッパーの視点に立っている行政史料なんかを集めていこうという、そんな感じです。これは無料で一般公開です。

建設保証会社。これは何だか皆さん知っていますか。東日本と西日本と北海道だけあるのですが、これは、いろんな工事発注をやるたびに、相手が倒産すると非常に問題があるというので、それを保証する会社なのです。ただし、それは役所がつくってしまっていて、必ず契約の一部のお金をそこに入れるわけです。大部分はつぶれない会社が多いですから、それが膨れに膨れて利潤がたまっていて、だいたい歴代建設次官が行くポストなのですが、非常に槍玉に上がっているところです。その西日本の会社は図書館がちゃんとありまして、主に社史を集めています。いちばん持っていますね。多少社会的貢献しているのかもしれませんが。

いろいろ知っている限り書いてみたのですが、日本建築センターというのは、国土交通省の住宅局がいちばん大元の外郭団体で、つい最近、ここと、住都公団の晴海の古い団地が合体で再開してきれいなすごい高層ビルになりました。晴海のトリトンとかそんな名前かな。大江戸線から目の前のところの高層ビルの一角に入っていますけれども。ここにある小宮賢一文庫というのは何かといいますと、小宮賢一さんというのは、私の本にも出てくるのですが、旧内務省の都市計画、住宅をやっていて、戦後の建築基準法をやった人です。この人も史料を大事にとっている人だったのです。ところが、亡くなったあと、奥さんがさすがに音を上げて、部屋を占拠している史料をもう持ちきれないというので、たまたま相談した人が横浜市元部長でこういうのに熱心な人だったのです。この人は戦前の建築行政を調べて博士論文を書いた人です。というので、小宮さんの2代あとの国の建築指導課長に持ちかけたわけです。この人はまだ隠然たる力を持っていたものですから、建築センターのところに、「君のところ預かれ」と言えたのです。で、偶然廃棄を免れた。しかも、これは整理して公開しています。わずかですが、これが本当に珍しい例です。

最近の例でいいますと、佐藤昌さんというのはこの人（『浮生録記—佐藤昌先生米寿記念回想録—』）なのですが、満州国から、なにしろ関東大震災の隅田公園から仕事をやった人です。いま100歳で、さすがにいまは寝たきりなのですから。この人のヒアリング記録を私が仕掛けてやったのですけれども。ということで、本人の勉強資料、保存資料を公園緑地協会に保存して、いずれ公開すると。こういうお化けみたいな人がいるとやっとな。

つまり協会にとっての恩人ですから、寄贈すると言えば断れない。

都市計画協会の飯沼一省さんというのは、これは内務省の都市計画課長だった人なのですが。この人の史料は、一部、本人が1920年代に欧米に出張したときの史料があるのですけれども、さっき言ったように協会がそういう公開できない状況です。

あ、これ（『浮生録記—佐藤昌先生米寿記念回想録—』）は協会では有償発行しています。非常に面白い本ですよ。

伊藤 オーラルなんですね。

越沢 まさにオーラルをやったのです。オーラルヒストリーそのものです。で、技術系では唯一本になっている人です。実は私自身そういうことをやっていたのです。

実はきょうの午後やるのですが、内務省の事務系をやはりやって、こういうのはお金がないと無理だということで、国の審議会の委員をやったりしてたまたま私もそういうのを言える立場になっていたものですから。ちょうどいま国土交通省の幹部の方が東大の法学部を出て、御厨さんの2年先輩で、佐藤誠三郎ゼミ出身なのです。政策研究院ができるときに、佐藤先生から、建設省から人を出せと言われてたらしいのです。そういう人なので、政策研究院にはご理解がありまして。やはり、旧内務省、特に事務系の先輩はもう80歳、高齢だし、いま聞かないと危ないですよということで。旧内務省の人たちがいろいろがんばっているのは自分も知らなかったというのがあったものですから、じゃあ、オーラルヒストリーをやろうと。で、御厨さんに相談したところ、御厨さんのほうで科研費をとってもらおうと思っていたら、自分のほうに有り余るほどあるということで、それを使ってくださいと。御厨さんに怒られちゃいますが（笑）。

というので始まったということで、1回目が前田光嘉さんという元建設次官をやりました。あ、その前に、総務審議官というナンバー3のポストまで行った吉田公二さんという人をまずやりまして、それから前田光嘉さんをやって、いまやっている河野正三さんは元国土次官です。その次に決まっているのは、竹内藤男さんという元都市局長で、元茨城県知事です。それは前田光嘉さんが引っ張り出したということで。ご本人はやはり80歳なんですね。そういうことでやって、ま、当分続くんじゃないかなという。とうことで、彼（武田さん）が入ってきたものでだいぶ助かっているのです。というのは、建設省の係長は史料整理とかいっても知らないですね。ということで、武田さんがついてくれたので、少しはかどるかなと。

伊藤 それははかどるでしょう（笑）。

越沢 ということで、一応、建設省の都市局長を経験している先輩を中心にオーラルヒストリーというのですが、都市局長経験者がエリートですので、都市計画に沿っているいろんなことを聞いていますが。1回終わるごとに、もう1回さらに聞くとね。むしろ都市計画の建設行政の中身を聞いていまして、政治家との付き合いとかそういうのはあえてあまり聞いておりません。ただ、河野正三さんの場合はちょっと出てきましたね。（田中）角栄さんのやりとりとかで面白い話が。それはこっそり、興味があれば、伊藤先生経由で多分見られるのではないかと思います。ご本人に公開する承諾はまだ得ておりませんので。

伊藤 まあ、おいおい公開する。

越沢 ただ、前田光嘉さん自身は、オーラルヒストリーの記録をすでに手直ししているそうです。本人は実は目がお悪いのですけれども、秘書の方がいて口述で、「こう書いていますよ」とか言って、それを直して。

従来は、個々に断片的なヒアリングというのは、私もやっていたことがありますし、こういう雑誌の何周年記念号でやるということがあったのですが、結局散逸してしまっているのですね。だから、政策研究院でやるのが多分非常に大きな意味を持つと私は思っています。

特に問題だと思っていますが、一例で持ってきたのですけれども、このような史料（『内務省事務概要 昭和12年6月』）が本当に保存されていないのです。これは内務省の年鑑なのですけれども、これを復刻するだけで売れると思うのですが、誰もやっていないですね。

伊藤 いつ頃のものですか。

越沢 これでたまたま昭和12年。

伊藤 何というタイトルですか。

越沢 『内務省事務概要』という。

伊藤 だいたい毎年どこの省庁でもつくっているはずですよ。

越沢 これは全容はわかりません。これはたまたまある人からいただいたのですね。君、使いたまえて。これだけでも、私の分野でも役に立ちます。これだけの史料でも、私にとっては非常に貴重な史料があるのです。というのは、予算の史料はここしか発見できないのがあったのです。早速これをすぐ活用して論文を書きました。

問題は、国立国会図書館分館である建設省図書館。あれは大変問題でして、あそこの職員は全然史料収集をやらないのです。それから、あれはだいたい午後5時で閉めちゃうのです。だから役所で何も役に立たないそうです。国の役人は夜遅くまで仕事をします。だから非常に問題で、国立国会図書館の分館というのは廃止したほうがいいですね。

伊藤 形だけなんですから。

越沢 だから本当に困ったもので。これは都市計画協会に保管されている史料ですが、この手の文献（『大都市再開発問題懇話会 第一部会基本問題部会速記録』）が建設省図書館に残らないのです。これは、東京、大阪の高速道路計画とかいろんなのを全部決めたときの重要な、一種の審議会に相当する、公式につくった会議ですが。これは飯沼一省さんがたまたま都市計画協会に寄贈して、これが本当に数冊残っているのです。こういう非常に重要なものがどこにも残っていないのです。当時、こんなことをやっていたのですね。

伊藤 飯沼一省文庫のなかのものなのですか。

越沢 これもほんの数冊だけ残っていて、どこの図書館にも残っていないですね。こういう議事録がいちばん面白いのです。ちょっと皆さんパラパラご覧になってみてください。という状況が非常に嘆かわしいと私は常に思っています。

伊藤 嘆かわしい状態は全国いたるところにありますので、いまさら驚くことはないのですけれども。

越沢 特にこういう『内務省事務概要』のような刊行物ですと、これはすべての内務行政

のもとですから、こういうものもきちんと揃っていないのが非常に問題だと私は痛感しております。

私はもともと旧植民地の都市計画から研究を始めたのですが、いまからもう25年ぐらい前。もっと経つかな。当時存命だった人からいろいろヒアリングしたのですが、やはり、特に旧植民地は戦乱で引き揚げのときに持ってこられなかったのが大部分ですから散逸しているのと、その関係で、当然そういう人は赴任前の日本国内のものも持っておりませんし、偶然持っている人がいても、やはりもらえるという人間関係はなかなかつくれないですよ。大学院生のペーパーがいても。

あと、こういう経験があったのです。たとえば、旧内務省で戦前の華北政府に行って、そのあと運輸省に戻って局長ぐらいで辞めた人がいるのですが、その人は惜しかったのは、その人にたどり着くまでにだいぶ時間がかかったものですから、数年前までピンピンしていたらしいのですが亡くなって、娘婿夫婦がいるので鎌倉へ訪ねて行ったのです。そのちっちゃな書齋ですけども、見ていいですよということで見ていたのですが、それで、旅行鞆一箱分、借りていったのです。ある時期に、返してくれと行って、「古本屋が来ましてねえ」と。やはりそういう旧内務省の局長ぐらいに行った人のところは、それは技術系ですけども、古書店がそういうリストを持っているらしいのです。それで売ってくれと。そんな感じで、私は一部コピーしたのですが、多分それはもうバラバラになっているでしょう。だから、「もうちょっと前に来てくれれば、本人は一所懸命しゃべったんでしょねえ」なんて言っていたのですけれども。

実は私が譲り受けた方も何人かありまして、私の研究の元々はそういうのでほとんど成り立っています。この佐藤先生にもずいぶん教えてもらいまして、その代わり私も逆に、本人が持っていない、かつて本当は知っていて持ってこられなかった史料で、私が別で収集したのを差し上げたりして、本人がまた本を書いたりしていましたので、そういう人間関係がありましたから、なかには君にあげるよなんていうのがあったり。その延長でこういうヒアリング記録をやって。やはり本人から言えないものですから、佐藤先生のこういう記録を出さないとだめだよと行って、結局協会の費用で。まだバブル時代ですから協会はお金があったのです。これは有償刊行物で、いま買えます。面白い話がずいぶんありますよ。

それからあとは、たとえば『内務厚生時報』もきちんと揃っていないですね。東大にも一部しかない。こういうのをリプリントすればいいのですけれども、結局復刻するものが、どうも日本の場合どうしてもイデオロギッシュな政治研究が多いせいとか、そっちのニーズが多いのか、いかに朝鮮人を弾圧したかとかそういう史料は一所懸命復刻される傾向があるのですけれども。ま、それは事実ですからいいのですけれどもね。本来のこういうオーソドックスなのは意外と復刻されないな、というのがあるのです。『内務厚生時報』も復刻されていないですね。これはずいぶんいろんな研究ができるのですが。

東大関係ですと、法学部がけっこう持っていますが、あそこは他学部生を入れないですね。敷居が高くてなかなか利用させない。東大法学部は非常に封建的で、利用させない。非常に困りました。そういうことで非常に残念です。

あとは、この人が実は史料を持っていて、亡くなった瞬間史料散逸が危ないというのがわかっているけども、亡くなった直後に奥さんとか息子さんにそういうことを切り出すのはできないし、当時、私は個人の立場ですから。都市計画の建築関係ではこの人だけが唯一持っているというのがあったのですけれどもね。最近、そういうのを辿れるほどある程度人間関係というか立場ができたので、その人と親しい同僚という人がわかって、訪ねたら、いや、もう処分しちゃったとかね。失敗したなあとか、いろんなことがあります。ですから、ある程度そういうことをわかっている人間がそれなりのそういうことをやれる大学のポストにいないとなかなか史料収集や寄託移管は無理ですね。それを痛感して、たとえば高度成長期の日本のやっている諸々のものでも、いまから組織的収集をやらなくともアウト。ですから、私の元々の関心事のところでもかろうじてフォローできた部分が多いのですが、たとえば昭和30年代以降はまだやり方によってはずいぶん可能だと思うのですけれども、どうなのかなあという感じがいたします。

皆さん、こういうのに関心があって研究する場合のベースとなるものですが、さっきの『名古屋都市計画史』みたいなものが唯一、ほかは類書はないとお話ししましたが、かろうじて手がかりになるのは、日本の場合どうしても災害復興とかのときに都市計画をやっていることがありまして、その記念誌を出しているのです。災害復興と区画整理の記念誌はそれなりにありますが、問題は、網羅的に収集している図書館がないのです。しかも非売品が多いものですから、国会図書館にもないのです。本当にこれは困ったものでありまして、弱ったなど。関東大震災のときはナショナル・イベントでしたので、復興記念事業誌を、内務省、東京市、いろんなところがつくって、これを読むとかなりの事実がわかります。戦災復興も建設省が一所懸命つくりました。ところが、大都市も、仙台、名古屋、広島あたりはしっかりしているのですが、出せなかったところがけっこう多いですね。大都市でもさぼっていたのが仙台とか、様々で、カラーがあるのです。戦災復興に関しては、大阪市だけはものすごく熱心です。地区別に全部出しています。しかもヒアリング記録つきというやつ。

私はだいたいそういうので勉強しているのです。座談会で愚痴を言ったり苦労話をしゃべったりしているのです。その読み取りと全体の流れを見ていると、いろんなことが類推できてくる。私の研究スタイルはわりとそれで、それと、いま生きている人の生々しい話と総合してこうやっていくと、だいたい、なんとなくこうかなあと読めてきて、またそれで突っ込んでいくとわかる。そこまで行かないと、はっきり言ってわからないですね。私の研究テーマの分野でいいますと、そこまでできる人は私以外には残念ながらいない。

伊藤 じゃあ、あなたが養成しなきゃならない。

越沢 ということで、弱ったな、という実態でございます。

戦後に関して幾つかいいますと、住宅公団とか都市基盤整備公団についてはやはり時々そういう記念誌を出して、まあ、どうってことない史料なのですが、それすらも多分それ以外は刊行されてないと思います。

それから、〇〇協会の〇〇周年記念誌というのが時々あるのですが、この『日本の都市再開発史』というのは、戦前の章は実は丸ごと私が書いています。そんな状況ですから、

追って知るべしと。

あと都道府県が、ある時期に流行があったのですね。昭和50年代頃に、たとえば僕が知っているのは、岩手県、福井県、それから静岡県とかが土木史を出しているのです。土木行政史。だから、土木部が県にできて何十年史とかだったのかな。一冊、このくらい分厚い本が多いのですが、いわゆる広い意味の土木行政には参考になります。最近ですと、関東地建がなくなっちゃったものですから、去年記念誌つくっていますね。

伊藤 関東？

越沢 国土交通省になりましたので関東地方建設局が廃局になりましたからつくったり。ただ、これを全部の地域でつくっているとは思わないですね。そんな感じです。

ということで、なかなかそういう情報すら出てこないというので、私のノウハウを一つ教えてしまいますと、こういう存在を調べる方法のひとつのいい方法は、ありとあらゆる古本屋の目録を集めるのがいちばん楽です。だいたいこういう事業誌は読まない人に記念で送るのです。各都道府県の部長の部屋とか、だいたいそこで部屋の引越しなどでポンと捨てるのです。それから政界、財界関係者に送られたものがパッと捨てられるのです。それをまた、そういうところを知っていて古本屋は行くのですね。タダで仕入れて、しかも彼らは倉庫代みたいなもので、それを何万円で売るので。私は泣く泣くそういうのを何冊か買ったのが相当多いのですが、だいたい科研費が余ったときに売ろうという魂胆ですからものすごく高いですね。だいたい二十カ所ぐらいそういう古本屋を皆さんご存じだと思いますが、ああいうのを見るとだいたいわかります。そんなようなところですね。理工系の研究者はそんなの見ませんから、そういう調べ方はしないのですね。私は最新版の目録を見て逆に大元から取り寄せるのです。いろんなルートを辿って、タダでよこせというのをやったり、「あなた、これ捨てるでしょう。よこせ」と言ったり。ただ全部そうはできませんので。

伊藤 あなたの研究室も大変だね。

越沢 そうなんですね。ですから、私が死んだらどこに寄付できるか。政策研究院で受け皿をつくっていただくかなんかしないと。結局散逸するとなると、なんだかばかばかしいという感じもしまして。

もう一つは、そういうことの裏返しで、平時の都市計画史は極めて少ない。あるいは平時の土木史もないですね。

面白いのは、全国レベルで昭和初期に内務省の都市計画要覧。これは全国の全部の地図つきでやったものがリプリントで出ています。これも私が復刻を勧めたのですけれども、柏書房でリプリントが出まして、これはなんと御進講記念なのです。天皇に御進講した機会に、しかも内務省の局長ですから刊行できたのです。だからやはり、天皇陛下に御進講して記念につくるとか、そういうのをやるといいでしょうね。

皆さんこういう建設事業の予算の仕組みを知っている人がいるかどうかわからないのですが、いま外務省の機密費とかいっていますが、そんなことではなく堂々とやっていることで、皆さん、事務費という言葉を知っていますか。

伊藤 聞いたことないねえ。

越沢 下水道事業とか道路事業にもものすごいお金をかけるでしょう。当然ながら、役所にはそれに伴ういろんな事務的な、たとえばアルバイト費用とか消耗品代、印刷費とか、そういうもので一定程度、普通は最大5%堂々と確保することになっているのです。その事務費はそれをやっている部局の責任者が堂々と自由に使えるのです。多分、残業代も出していると思います。それは全然裏のお金ではないのです。その事務費を使えば何でも本当はできるのです。普通はどうしているかといいますと、土木の出先は自分で全部オールマイティーに使えるので、ランクが下だと土木事務所長というのはものすごい権限を持っています。国も地方自治体も。だけど、それは本当に堂々と認められている。それがないと事業はできない側面もあるのですけれども。ところが本庁部局になるとどうなるかというと、それを本部が吸収しちゃうのです。たとえば都道府県でいいますと、下水道事業をやっている、道路事業をやっているという事務費用を、たとえば土木部とか都市部の事務系が吸い取って、それを部全体にばら撒いたりするわけです。そこで実は都道府県の事務官僚と技術官僚の力関係が決まるのですけれども、ほとんどが吸い取られています。それがいろんなのに化けるわけです。タクシー券とかも含めて。それは正当な支出なのですが、それを技術が握っているか、事務で握っているかで、実権が決まる。だから、事業をやめた瞬間に……。なぜいままでああいう地方自治体の土木部ってなかで力を持っているかというと、事務費、お金を持っているからです。

役所の予算の仕組みというのはいろいろありまして、そういう観点を大学で教えているかどうかわかりませんが、地方自治で。あんまり教えないほうがいいのかわかりませんが、ま、余計なことを言っていますが、そんな話は事業史にはあまり出てきません。ま、そんなような、余計なことをお話ししています。

戦前、こういう大阪、名古屋、京都、神戸の都市計画史みたいなものは実はあるのですが、非常に稀覯本でほとんど流布していないですね。『第一次大阪都市計画史』は本当に分厚い本でいい本なのですが、これも私はしようがないので古本屋で泣く泣く買いました。幾らだったかな。

伊藤 かなり高いですか。

越沢 ばか高いです。ばか高いため誰も買わないので、売れていなくて。やむを得ず、ま、しようがないということで。これを買ったのはわりと最近でして、数年前かな。そんなことがあるので結局汲々とするわけですが、こういう研究は、私は実はこういうのは科研費を取れたことがないですね。まったく理解がありませんし、困ったものでありまして、今度は御厨さんのなかにまぎれて何かやるしかないですね。

伊藤 どこに出すのですか。

越沢 本来の専門分野に科研費申請を出すと全然だめです。

戦後の雑誌についていいますと、都市計画協会の『新都市』の昭和35年まで復刻が出版されました。同じ出版社です。例の不二出版です。つまり、『都市公論』が売れたので、『新都市』のこの頃まで売れるよと言ったところ、やって。これも、まあまあ成績がよかったようです。この頃まではわりと面白いのです。ところが最近のものは、私もしょっちゅう書いて、いま私は都市計画協会の理事もさせられていますのであんまり言ってはよくないの

ですが、行政ベースの公式な文書が多くてつまらないです。最近私が書いているのが非常に面白いといわれて、それをきょうお配りしたのですが。そういうことがあって、どういうわけかちょっとこういうこと、20世紀の都市計画を振り返るとかですね。普通、6ページぐらい皆書くのに、異例で、数十ページずつ、これは3回目なのですから。というのは、こういうことを許す幹部がいるのでイレギュラーにやっていると。つまり一連のオーラルなんかをやったり。これは実は校正刷りなのですが、遅れに遅れて、私のせいで発行が2ヵ月遅れて5月号なのですから。たとえば例をいいますと、ちゃっかり、オーラルヒストリーもやはり宣伝しなければいけないものですから、これの何ページだったかな。

武田 59ページです。

越沢 そうそう。これを今度続きでやるわけですね。それとか、ここにいろいろ引用したのが『土地住宅問題』。これはなくなった雑誌なのですが。こういう断片的なヒアリングというのはけっこうあるのです。それすらいまは集大成がなくて、私はその一部を引用しなからやっているので、本当はこれをもうちょっと突っ込んで聞いておいてもらおうとよかったなというのがあって。たとえばこの小林忠雄さんというのはもう亡くなっています。残念なんですよ。そんな感じがありますが、一応そういうのも断片的にやりながら、史料が散逸して、ないよというのは、61ページのところに、こういう小冊子もなくなって嘆かわしい。これは実は国に向かって言っているのです。あんたら、ちゃんとやらないと危ないよと、ここにはつきり。

ここにあるように、実は政治史として面白いのがありまして、いろんな人の話を聞いていると、佐藤栄作がかなりリーダーシップをとったとか、各省庁がいろいろ……。都市計画は旧内務省の権限ですから、自治省が手を出したりいろいろなことがあって、皆さんが知っている新産業都市のときには、ここが新産都市と決めるときに判子が60個要るとかそんなばかなことになったので、これではまずいと。

それから面白いんですよ、この大塩洋一郎さんという人。これは次のときにオーラルヒストリーをやる予定なのですが、これはかなり大物だった課長さんなのですが、こんなことを書いています。59ページのところです。「三つの壁」。だから、当時は役人がこんなことを平気で書いていたのです。最近の法律には、協議しなければならない、意見をきかなければならないとあるけど、これは協力的、互譲的に見えるけど、裏を見れば熾烈な各省の権限の争いの結果だとか、覚書によって実は協議させられているとか。いまだきこんなことを書いたら大騒ぎになる話ですけども、こんなのを平気で書いています。大塩さんのことを言っているのではないのですが、当時の課長はみんな大物で、ずっと夜赤坂でドンチャンやっていて、朝、そこから通うとか、そういうことが平気な時代ですから。大塩さんがそうだと言っているわけではありません、そのぐらいすごかったという。

これは多分建設省が仕掛けて政治家を動かしているのだと思うのだけど、宮沢喜一に発言させてこうやったとか。60ページ。宮沢さんというのは全然そういうリーダーシップをとらない人ですから、これは多分言わせたのでしょ。ここで下河辺（淳）さんが出てきたり、いろんなドラマがあるようです。これも大塩さんがわりとしゃべっているの

辛うじて政策決定プロセスがわかるのです。

あと、それ以外の大塩さんの上の、つまり参事官というのがいまでいう局の次長なのですが、その人は農林省の幹部と調整をやっているのです。この小林忠雄さんね。中野和人さんという人とやったと。だからいろいろ重層的にやっている人なのです。それは総合しないとわからないのですが、結局このような研究は誰もやっていない。私がこれに書いたのは、そういう政策形成過程プラス、この線引きがいったいどういう効果があったかと両方やらなきゃだめですよとっているのですけれども、それを誰も研究して解明していないものですから、結局堺屋太一みたいに中途半端な「景気浮揚対策と容積率」とかいて、あれは俗説なんですけれども、そんなのがまかり通っていて非常に情けないという感じがいたします。そういうことをやると、政策研究院で博士論文にするテーマなんて本当にゴロゴロ転がっていますので、そんなことで、ぜひ幾つかやってほしいなという感じがいたします。

伊藤 北大の院生にはいないのですか。

越沢 まだ幼くて、それはやはりちょっと無理ですね。

伊藤 北海道の教授が何かテレビに出ていましたよ。

越沢 いろんな関係団体、実はこの同じフロアにも宅地開発。私はその雑誌もとっておりますけれども、近年になればなるほど政策形成過程にする論考が皆無になりまして、そういう意味での史料的な価値はなくなります。

なぜそうなったか。こうなるとあんまり言う問題なのですが、まあ、言ってしまいます。やはりこういう分野、都市研究——アーバン・スタディーズ——の未成熟と、政策検証の弱さということだろうと思ひまして、これは大学と行政の双方の責任だろうと思ひます。それから、学際的学科といいますか学際的大学というものが未成立でありまして。なぜそうなのか。根本的にいいますと、やはり現実の政策に無関心だろうと。現実に関心があれば結局そうせざるをえないのですけれども。そういうことで、アメリカの大学の学者を見たら、大学の学者がいきなり大統領補佐官なのがいかうのかどうかというのがありますが、ともかく日本では政策立案に無関心であるため、そういう政策に対しての提案も批判も多分できないだろうと思ひますけれども。

伊藤 じゃあ、何をやっているわけですか。

越沢 だから、何ですか、こんなことばかりやっているんですよ。袋小路に陥っていますね。土木は相変わらず交通量推計とかをやって、あれはもう時代遅れなんです。交通量推計をやるということは自動車交通量ですから、あれは日本では、戦後の交通工学をやったせいで街路の歩道の幅が狭まったのですから。どうやったって、結局、そんなことよりどんどん早く用地買収をやったほうがいいのです。ということで非常に情けない状況で。交通量推計をやる数学になりますので博士を取れるのです。だから土木も実は政策科学になっていないのです。そういう変な数値計算をやったり、そんなものばかり大学の世界では評価している。ということで、そういう状況があります。

きょういらっしゃる方が全員どういう方かわからなかったものですから、面白いのか面白くないのかちょっとわかりませんが。

伊藤 大変面白いです。

越沢 伊藤先生がいらっしゃるので、まあ、だいじょうぶだと思って。伊藤先生もだいぶ毒舌ですから、私も少し言ってもだいじょうぶだということで。伊藤先生と御厨先生でやっている、後藤田（正晴）のヒアリングとか竹下（登）のほうのとはまったく次元が違う話ですが。

伊藤 次元は同じですよ。

越沢 とは言いながら、現実のいまの公共事業といいますと、まさにこれにお金が行っていますので、そういう意味では本当は重要だろうと思っています。

これ（『神奈川県都市政策史料』）は、実は私は以前神奈川県庁におりまして、そのときに自ら勤務時間中にそういう役所の史料をゴソゴソ。さっき言ったこれをどうやってやったかという、執行残になるのです。執行残という言葉をご存知ですか。

伊藤 え？

越沢 あまり変なことばかり覚えてしまうとまずいですね。当然、役所というのはどんなものでも予算があって、たとえば印刷物をつくるのにでも、100万円あったらそれを入札かけるのです。当然、上回ったのでは落札できないのです。98万だと2万円余るでしょう。設計費が大きくなればなるほど、1千万円でこの調査費をやりますといたら、普通いったって、談合していなければ900万ぐらいで落ちるはずですね。余ったお金をどこに使うか。またそれをどこかに使うのです。予算書に載っていない予算というのは非常にいいわけ。それがまた吸い取られてどこかに行くわけ。総務課に。私は逆にそれをよこせと。というのは、そういう人と仲がいいと、その課のなかで。

伊藤 だいたい推測はつきますよ。

越沢 だから合法的にやっているのです。

伊藤 いや、それは合法だというのはわかります。

越沢 つまり、こういう印刷費は予算を出すと絶対通らないですから。本当に日本の役所の体質が悪いのは、これは中央官庁もそうなのですから、調査費、印刷費、広報費というのはまったくお金のつかないのです。

ですから、国は政策官庁になればなるほど、本当はそういう調査費を充実して、それから住民の意見を汲み取るとまさにその経費が要るわけですから、そっちにどんどんお金をつけてやるのが本当の姿ですね。手間隙もないとできない。ということで、辛うじて当時職務権限上アクセスできた史料でつくって、これを5冊出したのですけれども、そのあとは誰も続きません。

伊藤 県史の史料編みたいだね。

越沢 そうです。県史に載らない話なので。

神奈川県でいいますと、神奈川県というのは長洲（一二）知事ですからわりと先進的に見えるけど、実態は違いまして、情報公開制度をやりながら、実は全部史料を貸すだけなのです。販売はやっていなかったのです。販売に踏み切ったのは、私がやったせいなのです。情報公開とかやらないのです。全部堂々巡りなのです。文書課とかああいうところをグルグル、グルグル。じゃあ、うちでせっかくつくったこれをコンサルタントとか県会議

員だけにあげるといふわけにはいかないから、費用もかかる。それから課の使命がそうだと。したがって、原価に対してこうだ。これで売りますとやったら、慌てはじめて、それで急遽販売することができたのです。そんなものですよ。コロッと変わりますから。

伊藤 これは販売したのですか。

越沢 これはできなかつたから、次のありとあらゆるいろんな報告書を私はどんどん販売したのです。それ以後、みんな売らうようになったのですね。非常に細かいことですが、制度を変えるのは簡単なのです。あれは要するに面倒くさいということだけなのです。現金收受をどうするのかとか。そんなのは決めればいだけで。職員はどうするんだ、そんなのは非常勤を雇えばいいのです。そんな程度ですね。だから多分、本当は政治家が上手にそういうことでやるといふようなことがずいぶん変わるのでしょうけれども、あんまりそんなことに関心がある大臣、副大臣は少ないようですし。ということであります。

伊藤 だいたいお話はそういうことで。

越沢 それから、これ（『大阪府の都市計画』）は、大阪府で20年一筋都市計画を担当した人のオーラルをやらないと危ないというので、これに共鳴する幹部がいたものでやったという。

伊藤 オーラルですか。

越沢 ええ。ところが、聞き手側を部下がやるとやりづららしいのです。だから私がやって、横で聞いていたという。これも非売品ですけども、とにかく作っちゃった。公開資料です。これ以降続かないのですよ。大阪府はなにしろ本当にいま赤字ですから。

伊藤 わざわざ非売品を。非売品というのは、くれるということですか。

越沢 そうです。ただでくれるという意味です。それが『新都市』の復刻なんですね。これももう誰も持っていないのです。大阪府にすらないという。というので、私が自分で都市計画協会でもコピーして、それで渡してリプリントしてもらったのです。そんな情けない状況なのです。

伊藤 ああ、『新都市』のバックナンバーですね。

越沢 ええ。その人は、このヒアリングをやったあとで、もう人と会わない人そうです。そのときが最後の唯一の元気だったという。

伊藤 65年11月号というのは、何か特集なんですか。

越沢 ええ、そうなんです。それもたまたま大阪府の幹部でそういうのに理解ある人がいて。それは数人いないと無理でしょうね。部長クラスの人、全部。

伊藤 ま、部長クラスまでというか、部長が一人関心を持ってくれれば十分じゃないですか。

越沢 だいぶ違います。もし政策研究院で動いてくれるのだったら、もう追跡不可能かもしれないけれども、この人だとこれを持っているというのを。たとえば、一度私は資料を見せてもらって、ご本人に返却したのは、戦後の建設省の住宅局の課長ぐらいをやった人かな。その人が住宅営団の資料をどさっと持っていたのです。お借りしたのですけれども、当時私は院生のペーパーですから、戻してくれと。ご本人はもう亡くなっているかどうかなのですから、追跡がまだ可能かもしれないですね。

伊藤 協力してください。

越沢 実は住宅営団の資料はいまある出版社から出版されているのですけれども、あれはバイヤスかかっています。というのは、そのときの技師だった人が、西山卯三という、京都大学教授でコミュニストに近い人なのです。編集がちょっとバイヤスかかっちゃっているのです。西山さんの保存資料でやっているのです。それはそれで、資料が公刊されたことはいいのですけれどもね。

伊藤 それは何というものですか。

越沢 8冊か何かぐらいで、出版社は日本経済評論社だったかな。住宅営団何とかかんとかといって。西山卯三さんのお弟子さんたちがやっていた、関西の。

伊藤 私はこの大学の図書館長なのですが、もうお金を全部使っちゃいまして、これからあと、来年三月までは一銭もないと（笑）。それで、あとは学長の持っている経費を必死になって狙っているという。だいたい、小さい大学ですからパイが小さいのですよね。買うほうは壮大なことを考えているものだから。

越沢 移転の建設費用のなかにもぐりこむのがいちばんいいんじゃないですか。

伊藤 それもいいですね。

越沢 新設大学ですと、たしか最初に何万冊。あれが唯一の予算なんですよ。だからそれと同じ方式で。

伊藤 そんなのを使ってもほとんど意味がないくらい小さいです。これは、土木建築なんかのことを考えたら、話にならないような端金。森ビルかなんかにやっぱりちゃんと……。

越沢 やはり容積率を売買するのがいちばんいいかもしれませんね。

伊藤 あと、いま幸いなことに、皆、本やなんかの置き場に困って寄贈してもいいやという人はけっこういるから、もらうほうはいいのですけれども、今度は整理費用がない。

越沢さんのお話を伺っていると、全然専門は違いますが、僕がやっていることと似たような行動様式だということがわかります。ついこのあいだも、人の家に行って、押し入れの中にクビを突っ込んで、蒲団袋の後ろにないかなあと思って（笑）。

所澤 群馬大学教育学部の所澤と申します。私は東大の東京大学史史料室に勤めていたときがありまして、そのときに、内田祥三文書だとかなんかもずいぶん見たのですけれども。建築の方は、大学の研究室、講座単位で、それから教授のところから大量に史料が集まるというような状況があるように思うのです。ところが大学の講座というのは、昔の講座と違うのかもしれませんが、研究の継続性というのがあまりなくて、先生が変わってしまふとその史料が全部散逸してしまう、あるいは保存できないという状況があるのですね。それは文科系でも同じだと思うのですけれども。いまの伊藤先生のお話でも、伊藤先生が一所懸命集めた史料が図書館に入らなかった場合に。

伊藤 いや、僕は全部図書館に入れてありますよ。

所澤 ええ、でも文書だとかなんかだと、そう簡単にいかないんじゃないですか。個人の手帳だとかなんかをもらっちゃったりすると。

伊藤 いやいや、もらわないのです。必ず国会図書館なりどこなりに。

所澤 それで、そういう史料が大学に勤めているとやっぱりたまってくるのですね。そう

いう方がいろいろいて、退官するときにその処理がうまくできないわけなのです。そういう状況を改善するための何かシステムチックな方法がないと、1回史料が集まって50年ぐらいいいのですけれども、そのあとまた全部なくなるというようなことになってしまいそうな感じがするのです。その辺は、越沢先生なんかは建築のほうにいらしてどういうふうに考えていらっしゃいますか。

伊藤 いまのお話を聞いていたら同じじゃないですか。やっぱり、東京大学史史料室は定年退官の教授に全部手紙を出して集めると。

所澤 史料の選別が難しいというか。要するに個人が持っている史料というのは、図書なんかだと大半は図書館などに元々あるようなものだと思うのですけれども、一方、その審議会の資料だとか、そうじゃなくても、どこにでもあると本人が思って個人が持っている本でも、実はほとんど手に入らないようなものもあつたりというようなこともありますね。やはりある程度選別して集めていかないと、史料もあふれてしまうし無駄も多いということなんですよ。建築の方だとやはりそういう問題がほかの領域よりも切実なんじゃないかなと、いまお話を伺って感じたのですが。

伊藤 ほかの分野だって同じじゃないですか。

所澤 分量が多いのではないですか。どうでしょう。

越沢 普通の理工系は私みたいに本を持っていないですから、実験室ですよ。普段やっていることは。だから私はちょっと異常でね。

伊藤 偉い先生はいろんな審議会とかそういうところに出るでしょう？ そういう資料や何かをずっととっていけば、それは集積になりますよね。

越沢 だいたいそれを捨てる人が多いですよ。たとえば最近の例でいいますと、関西系の相当な有力学者の人がもうとっくに定年になっていて、最後に地元のシンクタンクの理事長をやっていて、それが亡くなったあと整理するのをたまたま私が知っている人がやったのです。史料を三つに分けて、本の類はシンクタンクに残したのです。シンクタンクで要るから。あと困ったのは審議会資料。じゃあ、俺が引き取るからといって。それは関西の自治体の審議会なのですが、捨てられるよりなんだからと、私の部屋に何十箱ダンボール箱が積みあがっていて、全然開けていないのですけれども。神戸とか京都の審議会資料です。それだって、私からすると保存の優先順位が落ちますから、どうなることやら。いま辛うじて持っていますけど。だから、基本はやはりスペースの問題ですね。それはやっぱり床を持っている人じゃないと無理ですよ。単純にその話です。それとあとは、自分が出るときとか定年のときにどういう考えでそれを処分するかという、本人の意思なんじゃないですか。

伊藤 やはりそれにはマンパワーが要るでしょう。受け取ったときに目録をつくるとか。それがなくてできないですよ。ただもらって、箱に詰めて積んでいるのでは、自分だって嫌だしね。自分がいなくなったらどうなるかわからないじゃないですか。だからきちんとしたところに。とにかくいま、われわれの分ぐらいいきちんとしたところをつくろうという形で。

所澤 いや、地方国立大学なんか困るのは、もう図書館のスペースが足りないわけなの

です。とにかく退官したときに国費で購入して研究室にたまっている図書でさえ、図書館にはもう受け取ってもらえないというくらいになっているわけです。もう、本当にスペースがないのです。

越沢 それはさっきの話の33㎡と25㎡と同じで、与えられた場所がないだけであって、実は日本の土地は余りに余っているのです。どこだって余っている、大阪のベイエリアだって余っているし、新日鉄堺の土地は全部余っているのですよ。むしろそんなことで、本当は銀行の金融債権の処理とか、あれは全部土地関係が絡んでいますからね、本当は何かそういうところでやるべきだよ。むしろ土地をよこせということを実はこういう研究分野の人は言うべきじゃないですか。だって、結局はそんな、最低本が傷まない空調と設備があればいいわけで、土地がゆったりあれば二階建てぐらいでもいいわけですよ。スペースがあればいいのですから。

伊藤 基礎さえしっかりしていればね。

越沢 なにしろいまは日本中に土地が余っているのですから。そういう客観情勢を見ないと。使えない土地はいくらでもあるんですよ。つぶれたゴルフ場の一個ぐらいくれとか、そういうのもいいんじゃないですか。本当に余っているのですから。

伊藤 余っているんですよ、たしかに。

越沢 大阪湾だって、いま、オリンピックが無しになりましたから、あそこは全部余っているんです（笑）。

所澤 理工系の強い大学は、古いものを全部捨てると。独立行政法人になるときに不採算部門だから要らないというふうにもなりそうなので、もうえらい困っていて。図書館の本さえ捨てそう。

越沢 文部省だってそういう考えで。だから、どこかでそういうことを言うように、上手に何か探すしかないんじゃないですか。

伊藤 引き受ける場所と人員があればいいんですよ。人員だって、そんなべらぼうに要るわけじゃないんだから。

所澤 それから、それはどちらかというと史料を残そうという誠意のある人の場合なのですけれども、一方でやはり、言いにくいけど、自分で史料を抱える方もいるわけです。もらってきたら一切公開しないと。非常に貴重な史料を昔役人だった方からまとめてもらってきて抱えていて、人には見せない。大学の研究室に置いておいて、退官しても抱えているというようなケースもどうもあるようで。大学の研究者のなかにはそういう方もけっこういるんじゃないかと思うのです。

伊藤 だけど、それを使って研究してくれる人はちゃんとフットノートをつけるからいいでしょうけれども、使わないで積んでいる人がいちばん困りますね。

所澤 まあ、そうですね。

越沢 それは廃棄されたのと同じと思うしかしようがないでしょう。

所澤 私が地方国立大学に勤めている感じでは、そういうような傾向を大学のシステム自体が助長しているような感じで。

伊藤 やっぱり別なところで引き受ける以外にないわけですよ。いまの越沢さんの話は、

建築、建築というけど、建築じゃなくて、国土政策とか、もっと広い視野の話でしょう。日本のこれからの政策において非常に重要な位置を占めている部分ですから、それも歴史的に検討していく必要があるということですよね。

さっきちょっと秋田市の話をしましたけど、僕が秋田市の市役所の地下に入ってみたら、べらぼうな量のあれがあるわけです。それはもちろん都市計画から何から全部あるわけです。だけど、これは公開していないわけですから、市史編纂のためにとにかく全部使わせるといって、一応われわれに対しては公開ということになっている。これは本当に面白い史料がいっぱいありますね。秋田市なんていうのは、上水道、下水道はけっこう早くやっているのですよね。大変な努力でやっているわけです。そういうこととか、交通問題。城下町ですから、道がこうなっているわけでしょう。それをどうするかとか。たとえば議会の議事録、市会の議事録も全部残っているものですから、そこでの議論なんかを見ながら行政文書を見ていくと非常にいろんなことがわかるのです。それは、内務省からこういうふうに言ってきているというのも全部わかりますし。また、都市計画をやっても、都市計画道路にべつに補助がつくわけじゃないんですよ。特別なところがつくのでしょうか？それをなんとかして取ろうというので上京するとか。そうするとその旅費が要るわけじゃないですか。その旅費を市会が認めるか認めないかとか、そういうことをワーツとやっているわけですよ。見ていると非常に面白いですね。でも、市会の議事録がきちんと全部残っているところというのもそんなにたくさんないですよ。

越沢 いま、常任委員会の議事録というのはきちんとしていないんじゃないですか。

伊藤 公開ですか。

越沢 公開しないから、いまの地方自治体はきちっと残さないんじゃないかな。

伊藤 地方自治体ですか。そうですね。

越沢 本会議はありますよ。

伊藤 だいたい議事録をつくっていないかもしれないですね。

中見 外語大 AA 研の中見でございます。非常に面白い経験をしたのは、中国の地方の公文書館でして、地方の文書館というのは全然日本のそれとは様子が違って、私はその地方の歴史の史料を読んでいたんですが、周りの人は水道の配管図とか、たいがいそういうのを見に来ているのです。逆に言うと、たとえば水道だとか道路の図面というのは、中国ではその地方の文書館が保管をしているわけです。こういう図面の場合、日本ではどうなるのですか。ある段階で、新しいのができたら前のものは全部捨てていく。ストックはしないのですか。

越沢 最新時点で切り替えているだけで、古いものはどうしているかといったら、多分残さないのでしょうかね。

中見 そうすると、ある道路にせよ、下水にせよ、図面上で時代から追っていくとかそういうことは、どこかでずっと保管しているなんていうのは日本ではあり得ないですか。

越沢 まず無理です。さっき言った永年保存文書にしていない。つまり、普段実務上使っていて、その最新版はつくる義務がある。台帳ですから。ただその台帳を各年保存するというのはやっていないと思います。それはさっき言った地図なんか典型ですから。だって、

印刷している都市計画図すら毎年保存していないですよ、みんな。

中見 毎年最新版も、たとえば県の公文書館や何かに送るといことはしないわけですか。

越沢 というのは、毎年つくっているものだからためていと大変だと。それはそうでしょうね。たまたま公文書館側が興味があって、ときどき揃えようという意識があればもらうでしょうけれども。

中見 私は清朝時代のか何かを見ていたら、隣が配水管か何かの工事のために技術者が来て、どういうふうに入管が埋められているとかかそういうところを見るとか。そういうことで、文書館といっても日本で抱くイメージと使い方が違うものですからね。

季武 日本でも、私の経験だと、福島県だったか、東京都公文書館ってよく行くんですね。建設屋さんに来てそれを見ていた気がしますが、ないことはないですよ。

中見 ただ私は日本の地方のそういうのに行っただけのことではないものだから。

伊藤 意外と地方の……。秋田の県の公文書館に行っても相当の分量の公文書は残っていますし、各部局ごとに整理されていて年ごとにありますけれども、かなりよく保存しているというか。要するに、文書管理をきちんとやっていると、いろんなものをどんどん捨てるわけです。さっき整理という話が出ましたけれども、整理というのは捨てることだと。その整理をきちんとやっていないから残っているわけです。公開するなんていうことは全然いま念頭にないわけです。国のレベルはみんな、情報公開、情報公開と騒いでいますけど、地方はまだ全然のんびりしていますよ。いまのうちにやらないと、そのうちにあそこも法律がかかってきちゃうと非常にやっかいなことになって、みんなボーッと捨てることになる。

越沢 たまたま戦災にあっていなかったり、あまり調査執行しなかったり、ゆとりがあると、なおかつのんびりしていると意外となんでもかんでも残っているという、そうなるのかもしれないね。

季武 私は創価大学の季武といいますけれども。たまたま宮崎県は残っていますね。県庁も。最近、『浮上する風景』という本を書いた人がありましたけれども、最近土木局が移転するらしいというので、どうしようかという話は聞きました。膨大な文書をどうしよう、引っ越し前になんとかしなくちゃと。

伊藤 いま市史でやっているのですが、このあいだ中、市営のガスが民間に売られたわけです。その史料をどうするかという話になって、とにかく市史でもらっちゃえというので、そういうのを片っ端からみんなもらって、倉庫のなかにガバーッと積んであるわけですよ。そうすると、捨てるものをどんどんもらってくるものですから、待てよ、あれは必要だったということがありまして、それで、「こういう文書がなかった？」という問い合わせがそこに来ると。だから、それは非常にいいことだから、とにかく現用文書に近いようなものもとにかく全部もらって、市役所のなかでサービスしようと。そうするとみんなが、やっぱり資料館が必要だ、公文書館が必要だということがわかって。

戸高 うちなんかでも厚生労働省から、以前やはり史料を処分する話があったんですよ。そうすると、「どんなものを残せばいいんでしょうね」という話をするわけです。そういう発言をしているということは、じゃあ、残すもの以外は全部捨てるということなんですよ。

ね。それで何でもいいから全部昭和館へ持ってきて、昭和館に見に来たら良いと言ったのですけれども。

伊藤 そういうことなんですよ。

戸高 そういう形を公式にとれるようなことであれば、相手も困らない、こっちも困らないということになり得るんですけどね。

櫻井 ちょっと話を変えてよろしいでしょうか。麗澤大学の櫻井と申します。先ほどから、事務系と技術系という言葉で、都市計画官僚あるいは都市専門官僚というのかわかりませんけれども、ときどき分けて使われていたのですけれども、史料の残り方というのはその二つで違いがあるのかどうかということ。それから、多分その史料の残り方のもし違いがあれば、意識が違うと思うのですけれども、そういうことで何かお気づきになられたことがあるのですかということ。それともう一つは、都市研究会なり、市政調査会なり、大阪都市協会なり、それ自体の資料はないのですか。その団体資料です。市政調査会ならば、出している資料はありますけれども、機関そのものの資料というか、都市研究会なら都市研究会が成立してどのような活動をしてきたかの印刷された資料じゃない段階の内部資料というか、そのようなもの。

越沢 最後の話でいいますと、都市計画協会は私は理事ですからかなり内部の状況を知っているのですけれども、基本的にはああいふ財団は理事会資料以外は全部保存していないんですよ。だからそういうものは何もないと思ったほうがいいです。特に都市研究会の場合、内務省から出た段階で多分捨てているんじゃないかな。

このあいだもこういうことがあったのです。こういう不況の時期ですから、分室があったのを取り潰しになって、持ってくるのでロッカーを処分しなきゃならない。そこにある図書は捨てなきゃならないと、私が全部引き取ったのです。一般図書ですけれども、ちょうど20年ぐらい前の図書なので、私はちょうど買ってない図書もあって。そんな状況ですから。これは実は必要ないかなと思いつながらね。

市政調査会はわからないですけれどもね。僕は最近では全然足を踏み入れていないのですが、何しろ、自分の蔵書をどんどん手放しているというところですから、だいたい何もないんじゃないですかね。ただ、市政調査会40年史とか50年史とか、そういうのはもちろんありますよ。それぐらいで、もうだめじゃないですか。だから、あそこはもう、そういう団体だと思わないほうがいいという。

あとは、事務系についてはやはり人事異動がある程度激しいものですから、あまり長く個人で持つという人は少ないと思います。というのは、事務系の人は最後は、定年とか亡くなったときにお弟子さんとかが回想録を書くことがけっこう多いのですけれども、自分でやっている仕事を詳細に書くという習慣はあまりないんじゃないかな。少なくとも僕の思っている旧内務官僚とか建設官僚の事務系の気質だとね。それから、近年の官僚は本当に異動が激しいですから、そんなのはまったくないです。全部きれいさっぱりやって、はい、さようならという。技術系の場合は少し異動が少ないのと、愛着のある人がやっぱり。つまり自分の手がけた本を大事にとっているというケースがときどきあるという。人それぞれ。

櫻井 そうするとやはり、政治的な観点の史料というのは残りにくい。

越沢 そうでしょうね。そういうのはほとんど史料になっていないんじゃないかな。というのは、幹部の部屋なんていうのはいまでもすごいですよ、どんどんレクチャー資料がワーッとたまるのですよ。絶えずどんどん減らしていますから。要するに皆に配った資料なんです。ということは多分、大元の総務課とか官房の政策課とかそういうところが一年ごとぐらいは持っていて、あと処分しているんじゃないかな。つまり、幹部は必要なときに言えば、すぐ持ってくるわけですから。自分が整理保存しているのは絶対ないです。ほっといても机の上がブワーッと、こんなに資料の山になっちゃうのですから。そういう世界です。だから、絶えず部下のそれなりのセクションが持っているはずだと。必要な限りは。そういう発想じゃないでしょうか。

ただ、さっき言ったオーラルの1回目にやった吉田公二さんがおっしゃっていたのは、「君、ちゃんと資料をとっておかないとなくなっちゃうよ」とか言っていましたよ。かなり重要な節目のことを言っているのでしょうか。自分はいいのだけど、結局、そういうのはなくなっちゃうんだよなとか。

伊藤 ほかに質問はありますか。

所澤 行政の政策判断の検証とか評価という話があったのですけれども。僕は海外の例はよくわからないのですが、前にちょっと新聞なんかで読んでいて気になったことがあって。以前西澤潤一氏が、日本でも戦前にこういう独創的な研究があったのだということを東北大学長のときにすいぶん言っていました。それで東北大の例をずいぶん出したのですが、それはあまり知られていないことが多かったのです。ということは、日本社会では独創的な研究があったという評価が全然共有化されていないというようなことだと思うのです。それは一面で欧米より科学史の研究、つまり歴史研究を通してなされる評価が足りないというような。要するに、日本の大学に科学史の領域とか技術史の領域というのはほとんど講座がなくて人が勤めていないというようなことと関係があるかなというように思ったのですが。ところが、いまのお話を聞いていると、そういうような形の評価だけではなくて、欧米では行政的な評価というのを自分自身で日本よりもやっているのだろうか。そこは、僕はアメリカとかヨーロッパの感覚はわからないのですけれども、先生の感じではどうでしょう。

越沢 技術史とかあれは欧米のほうがしっかりしていると思うのです。日本の場合はたしかにあまりきちんとそれで……。まあ、たとえば村上陽一郎とかいましたけれども、ほとんどほかはいないんじゃないですか。たしかに科学技術のそういうのをきちんと歴史的に見るとというのは希薄だと思います。それは一つそれとして、いまの場合でいうと、少なくとも私が関係しているものでいいますと、欧米の場合は役人があんまり異動しないのです。わりと専門職化しているの。向こうだったらもう、だいたい一人個室でいますからね。だからやはり非常に少人数が、もう部門ごとに決めていて、ある程度その……。やはりマイスターの世界なんだね。そういう話でやっていて。もちろん向こうでも絶対政治の世界と調整があると思うのですけれども、そのなかでわりと長期間異動しないとか、そういう感じがしました。だから、日本のようなケースがむしろ珍しいんじゃないかしら。こんなに

しょっちゅう、クルクル、クルクル回して、という気がしますけれども。だから、もちろん向こうの組織、たとえば向こうも地方の行政が変わったりとかいろいろありますから、そういうときにはかなりドラスティックに変わったり、多分引き継ぎはそんなにしないと思うのですけれども。まだどうかな。体質的に少し、やはり民族攻防の歴史を繰り返すところですから、文字とか形で言おうという意識は日本人よりあるんじゃないですか。日本はほうっておいても、だって日本語はこうだし。海外は国境が何しろ変わっている国ですからね。基本的には日本人よりは、そういうので語っておかないと自民族存在が失われるというのはなんとなく思っているんじゃないですか。

それから中国人とかああいうのは全然別。彼らはそういうので嘘でも本当でも言うとかいうのがありますから、やはりそこら辺は日本人は弱いんじゃないかな。「あなたがこう言ったんでこうで、だからこうでしょう」とか、日本人はそういうふうには言わないでしょう。

所澤 ええ、言わないですね。

越沢 上手に、そういうのを知っていて使う場合と、知らないのと両方ありますけれどもね。やはりそういうことをしないでできた民族なのか、よくわからないのですけれども。

所澤 日本の役所だと、たとえば、前にこういうことをやっていたけど、これはこういう点でまずかったからというふうにすると、その人が上司になっているということも関係あるのかもしれないのですが、要するに前任者の問題点を指摘するというようなことになるので、結局評価をすることがほとんどできない。非常に官僚制が悪く働いているような気がするのですが。欧米の場合だと、同じ人が勤めているということも関係があるのかもしれませんが、やはりそこら辺についての意識というのがだいぶ違うというふうに感じられますか。

越沢 それよりもうちちょっと、あそこはポリティカル面でガラッと変わるから、変わることに抵抗感はないんじゃないですか。かなり上のクラスが政治面で変わりますからね。だから、やっぱりちょっと認識が違うんじゃないかな。日本の場合はむしろそれがあまりなさ過ぎるので、組織のほうをある程度絶対視するというふうに出てくるんじゃないかな。向こうだったら多分、けっこう文書のあれだってあると思いますよ。改ざんじゃないけど、廃棄したりね。日本のいまの、普段日常でやっている重要なことがいつのまにかわからなくなるというのは違うと思うんだな。ああいう政権交代もしますしね。ああいうのはやっぱりこっそりどこかに持って行っているんじゃないですか。だって、いまごろシラクがどこかで金を使ったってやっているでしょう。あんなのはきっと元側近が暴いているんじゃないですか。そういうのはむしろ、ある意味ではもっと向こうのほうはいいかげんな世界だと思います。

伊藤 役人でも、前任者がやったことを踏襲するなんていうことは、逆に、前の人をやったから俺はこれはやらないと。せつかくいいことがあっても、後任者が来たためにアウトになるというのはしょっちゅうある。前任者に縛られているというような感じではないんじゃないかな。その省庁の習慣とか慣例とか、それには縛られているとは思いますが。

所澤 前の人がやっていたことを、次の人が来たときに全部変えてしまうわけです。

伊藤 全部なんか変えないでしょう。

所澤 たとえば文部省が学習指導要領を改訂するときに、前に行われていたことに対してきちんと評価して変えるシステムになっているとはちょっと思えない。どちらかという、人が変わったことによって変わるというシステムなんですね。

伊藤 そうですよ。その人の業績ですから。

所澤 結局、それは人が変わったことによって変えて、以前のことは評価しないということは、過去のものは要らないということなんですね。

伊藤 まあ、そうですね。新しいものができちゃえば、古いものは要らない。

所澤 どうもそういうようなことで、古いものは何も残らなくても、少なくともいまの行政システムでは目先の単位ではあまり困らないというような仕組みになっているような感じがしますけど。

伊藤 だからやはり、全体として自分がひとつの流れのなかのどこにいるのかということ意識しないで行動しているわけでしょう。子どもと同じですから。

所澤 まあ、そうですね。

越沢 行政にもいろいろありますが、ある程度お金が絡む話と、それから事業にかなり長期間要するものとかについてはかなり違うと思うのです。ダムなんかがいちばん言われるのは、一度始めたあと、いろんな経緯があつてなかなか切りにくいわけです。それをやるには通常の官僚制度というのはなかなかうまくいかない。いまそれが問われていますけれども。だからああいうものも、初期のどういうふうにしてどういう検討したかというのは意外と本当は皆持っていると思うのです。終わるまで公式には多分出てこないでしょうね。

戸高 そのへんは昔の役人のほうが一件書類というのを上手にまとめていたんじゃないですか。最初の起案から、会議のプロセスから、最後の結論までというのを、だいたい上手に一件書類としてまとめている。いやあ、昔の役人は上手にまとめているなど思ったことがありますけれども。新しいものはそういうのがないですね、みんな断片で結論だけという。

伊藤 それは役人の意識の問題もあると思うんですよ。俺がこういうのをやっている、これだけの貢献をしたという意識ですね。

越沢 いまなんか、留学して MBA をとったらすぐに辞めて、なんて思っている人がいますからね。そういうのは、非常にこの間風土が変わったんじゃないですか。腰掛け意識の役人が相当増えています。あくまでステップだと。今度、経緯は知らないけど、30歳で選挙に出たのもいるみたいですから、わかりませんが。

所澤 日本の風土がそういうような風土であるということであれば、古いものを残すためのシステムというのは、いまの官僚制度にはあまり期待できないということで、別なものをつくらないと難しいというような感じがしますね。

伊藤 役所のほうはいずれにしたって決裁文書で残るので、それ以外のものは個人文書としてですよ。だからやはり個人文書を集める以外にないわけです。ま、大いにやりましょうと、そういうことですね。

越沢 それは会社の研究でも同じだと思うのです。公式にはやはり株主総会のとかそうい

うものだけでしょう。だけど、それ以外のものはずっとたぐってくるしかないわけで。あるいは社史の編纂のときに社内の史料を見ることでわかることもあれば、現実にはなかなか……。多分、各重役のそういう史料をめくれば本当にいろんなことがわかるのでしょうか。けれども、実際は会社の運営の歴史といっても、本当はなかなかたどれないんじゃないですか。私はそれは専門外だからやったことはないのですけれども、多分、同じ問題が生じると思います。

伊藤 もう一時半になりましたので、お終いにしましょう。越沢さん、本当に面白い話をありがとうございました。

(終わり)

〔付録〕平成13年7月30日 第5回近代日本史料研究会報告

近代日本史料研究会レジュメ

都市政策、社会資本政策に関する歴史研究と史料

1 都市計画、社会資本整備のプロフェッションの形成

19世紀前半、 産業革命後の劣悪な都市環境・環境衛生の改善、社会改良。
都市拡張・首都建設。

19世紀半ば、 下水道、労働者住宅、建築規制、工場住宅村、首都改造。

1909～1910 都市計画 (Town Planning, City Planning) という用語、
概念の誕生。

日本 1888 (明治21) 東京市区改正条例

1919 都市計画法、道路法

内務大臣官房都市計画課と土木局、地方局

大学、専門家団体、調査機関

欧米 建築、土木、地理、農学→都市計画

最初の大学：リヴァプール大学 (寄付講座)

現在は、従来の建築・都市計画学部、都市学部、

または、公共政策 (政治学、不動産)・都市計画学部 例、ハーバード大学

職能団体の存在

日本 工学部にとどまる

政策・経営的な視点の希薄、欠落。

協会と学会の分離

戦前の都市研究会と東京市政調査会 (後藤新平)

2 都市政策の調査研究、都市の社会資本整備の政策研究の芽生え

<戦前の状況>

都市研究会『都市公論』 *自由闊達な論考多し。 *復刻済み

東京市政調査会、『都市問題』、市政図書館、現存

大阪都市協会 (?)『大大阪』、現存

名古屋の区画整理系、『都市創作』、『区画整理』

公園緑地協会、『公園緑地』、現存

土木系、『道路の改良』、『水利と土木』など。

大学

工学系、国立大学の都市計画講座は京大のみ。

文科系、大阪市立大学市政科 (?)のみ。

官庁の試験研究機関

内務省土木試験所→戦後の土木研究所

内務省防空研究所→戦後の建築研究所

戦後、建設省に建設政策研究センター

3 史料、保存文書、刊行物とアーカイブ

*行政は文書保存をしない。文書整理月間。行政が過去の政策判断の検証を踏まえた新たな政策立案、歴史的総括をしないため。庁舎のスペースが無い。

・文書の保存期間の壁

永年保存 *都市計画決定の原議決裁

永年保存が少ない *例 戦前の耕地整理

時限性非公開が無い *審議会資料・議事録、重要な報告書、会議資料等の廃棄

・戦災、町村合併、地方分権、省庁再編による散逸

・マイクロ化の欠陥 原資料の廃棄、図面の廃棄

・図面が保存されない

・国立公文書館 *戦前の都市計画内閣認可の原議

・公共図書館（郷土資料室） *関心無し

例 東京都中央図書館江戸東京室、西宮市立図書館と夙川公園

・都市博物館の不在と都市基盤整備への無関心

例 江戸東京博物館、新宿区立歴史博物館、相模原市立博物館

・東京都公文書館 *内田祥三文書の寄託

・大学図書館アーカイブの不在、大学図書館の貧弱さ

例 コーネル大学の体験、

北大の高岡文庫、都市計画協会の山田博愛文庫、大阪工業大学の玉置文庫

・日本都市計画学会の図書館構想の挫折

4 都市政策、都市計画、都市の社会資本整備に関する図書、史料の所蔵について

・国立公文書館

・国立国会図書館 地図室

・東京都

公文書館（東京市誌稿）、中央図書館、江戸東京博物館、緑の図書館（廃止）

・（財）東京市政調査会 *市政図書館の問題点

・（財）名古屋都市センター *戦災復興記念

・（財）大阪都市工学情報センター

・（財）神戸まちづくりセンター *阪神・淡路大震災

・（社）都市開発協会 *目録あり

・（社）西日本建設保証株式会社 *目録あり

- ・(社) 日本建築センター *小宮賢一文庫公開
- ・(社) 日本公園緑地協会 *佐藤昌文庫準備中
- ・(社) 都市計画協会 *飯沼一省文庫非公開

◎内務省刊行物で稀覯本が多い

『内務省事務概要』、『内務厚生時報』など。

◎旧植民地機関、内務省、建設省の幹部の所蔵資料の大半は散逸。

私の経験、体験をいくつか。

5 事業誌、建設行政史について

- ・災害復興、区画整理、再開発の記念誌はかなり有り。

ただし、網羅的に収集している図書館は皆無。

関東大震災の復興記念事業誌は数種、 国家行事。

戦災復興の事業誌、 建設省の編集。

大都市の戦災復興事業誌、かなり充実。

- ・住宅公団、都市基盤整備公団の記念誌 全国市街地再開発協会『日本の都市再開発史』

- ・協会の×周年記念誌

- ・都道府県の土木部設置×周年記念誌

- ・平時の都市計画史がきわめて少ない。

全国レベル 内務省の都市計画要覧 *御進講の記念

都市レベル

戦前は大阪、名古屋、京都、神戸など、稀覯本。 『第一次大阪都市計画事業誌』

近年は『名古屋都市計画史』のみ。労作。

6 戦後の雑誌

- ・都市計画協会『新都市』 *復刻

- ・日本公園緑地協会『公園緑地』

- ・日本土地区画整理協会『区画整理』

- ・日本道路協会『道路』、等々。

*近年になればなるほど、政策形成過程に関する論考は皆無。

政策研究としては資料価値が少ない。

7 その他

- ・研究の未成熟、政策論、政策検証の弱さ。大学と行政の双方の責任。

- ・学際的学会と学際的大学院・学科の未成立。

理由はなぜか。現実の政策への無関心。

(付録・終わり)